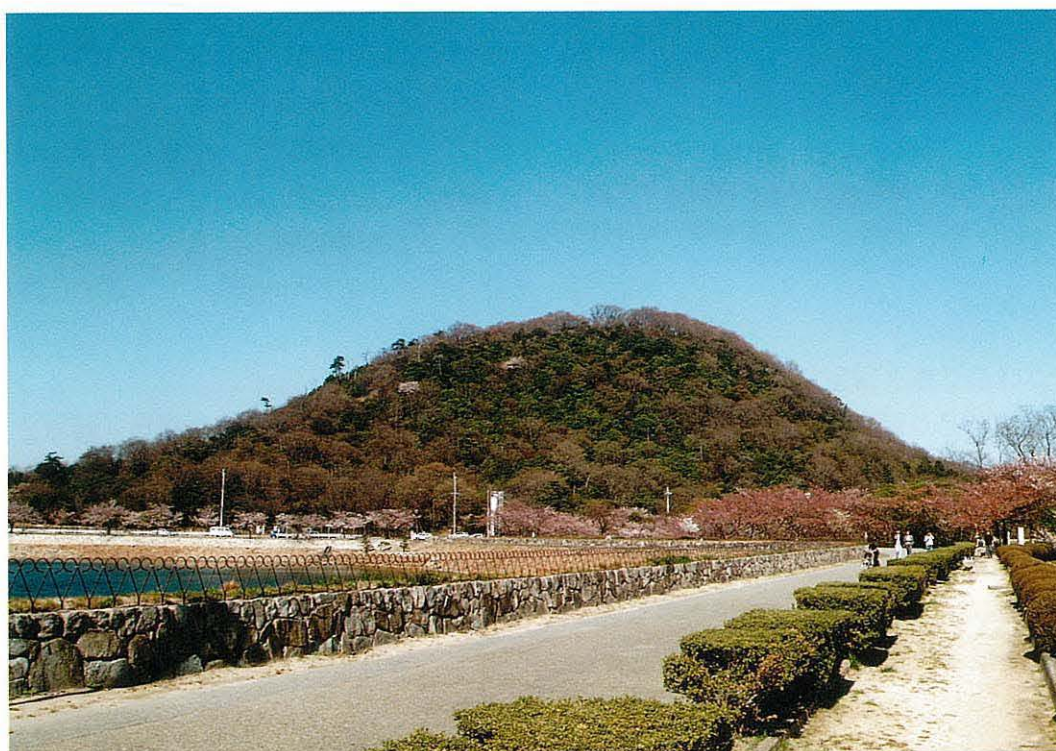


第一部



第 1 章 未来に向かっての取り組み

1 震災体験手記

震災を乗り越えて。

～後継者が語る先代の後姿～

藤本川魚店

(西宮市馬場町 4-6)

昭和 42 年、健氏の父・旭氏が、西宮神社の門前・西宮中央商店街にて創業したうなぎの老舗。震災で店舗は全壊するも、逆境をはねのけ仮設店舗でいち早く営業を再開、2000 年 4 月に念願の新店舗をオープンし、次男・健氏を後継者に迎える。2004 年秋、アーケードを取り払い、歩道を整備するなど、明るく美しく生まれ変わった同商店街は、若手を中心に「将来ビジョン検討委員会」を組織、賑わい創出のためのさまざまな企画にとりくんでいる。

●それは早朝、兄からの電話で始まった

朝 6 時過ぎ、早朝の静けさを打ち破る電話の音に、私は布団から飛び起きました。頭が回りきらない状態で出た電話からは、兄の声が響いてまいりました。

東京の大学に進学し、一人暮らしをしていた私。男兄弟ですので、よっぽどのことでもない限り連絡を取り合わない兄から、しかも早朝からの連絡に、直感で何かあったんだなと感じました。

「大変なことが起こった。とりあえず、お父さんもお母さんも無事やから。恐らくしばらくは連絡とれへんようになる。詳しいことは、ニュースに流れると思うから……」

それ以上は、兄も涙で言葉になりませんでした。それだけ伝えると兄は、電話を切りま



藤本川魚店 副店長 藤本 健氏

(西宮中央商店街振興組合理事、将来ビジョン検討委員会実行委員長)

した。普段、あまり連絡を取り合わない兄からの連絡、気丈夫な兄が取り乱していた様子、大変なことが起こったことは確信いたしました。何が起こったのかはまったく見当もつきませんでした。ただ、徐々にはっきりとしてきた頭の中で、兄の話にニュースが云々という言葉があったことに気づき、テレビのスイッチを入れてみました。

画面に映し出されていたのは、西宮神社上空からの映像。途切れた高速道路に引っかかるバスを中心に映し出される風景は、まさしく私が生まれ育った、父母がうなぎ屋を営む西宮中央商店街周辺の変わり果てた町並みでした。

これが、私の阪神淡路大震災の始まりです。

●懸命な父母の姿に、店を継ぐことを決心

先にも述べましたように、当時、私は大学四年生で、この年の春から新社会人として東京にある建築設計事務所に勤めることが決まっておりました。就職難の中、ほぼ自分自身が思い描く就職先を運良く勝ち取ることができ、残された大学生活を満喫することと、社会人としての新出発に胸躍らせ、できる範囲での準備をしようと西宮の実家へ帰省。そして、東京のアパートへ戻った矢先の出来事でした。つい何日か前に歩き回っていた町の変貌に、ただただ呆然と画面を見つめるだけで、言葉も何も出なかったことだけを覚えています。

日にちが経つにつれ、地震が残したすさまじい爪痕の状況を知りました。電話で交わす家族との話で、家も店も全壊状態になっていることを知りました。たくさんの方々が亡くなられたことも聞きました。ライフラインもストップし、多くの方が生活を困難とされていることを目の当たりにしました。

この時、決まっていた就職を断り、西宮の実家から通える会社に再就職し、家族と一緒に暮らそうと真剣に悩んでおりました。育ててもらった西宮の町に何かしら役に立てれば、との気持ちが日に日に募る中、震災から一ヶ月ほど経ったある日、実家の母から連絡がありました。

「今も大変な状況は続いてる。お父さんと、店も営業できへんような状態やから田舎に帰ろうか、なんて話もしてた。でも、この町に育ててもらって、少なくともうちのうなぎを楽しみにしてくれてるお客さんがおるし、何よりも大変な今やからこそ、町の灯台となってみんなに恩返しできる時や！って、お父さんと決意したんやで。大阪に炭と焼き台を買いに行って、昨日から道端でうなぎを焼きたしたんやで！」

家も店も手のつけようのない状況の中、何

としてもこの町に、自分達のできることで貢献していこう。もう一度一から立て直そうとする父母の姿に触れ、安易に実家に帰り再就職しようとする自分の姿を思い返しました。

「今、西宮に帰ったところで何の役にも立たない。それだったら、しっかり決まっている再就職先で会社の経営、社会の仕組みを習得しよう。まずは会社にとって必要とされるような人間にならない限り、西宮に帰っても恩返しできない」との思いに立ち、東京に残ること、将来自信を持てる日が来たとき、父母の店を継ごうと決心しました。

それから五年が経ち、私も会社である程度の仕事を任されるようになり、同期の中でも最初に役職をいただくなど、少し会社にとっても必要とされるようになっておりました。そんな時、実家から連絡があり、仮にお借りしていたお店を引き払って、店舗付き住宅を建てようと思っている、とのことでした。

すぐさま、五年前に決意した、日本の伝統の味・うなぎ屋を、お客さんに喜んでいただける老舗の味を継ぐことを決心しました。とは言え、任されていた仕事もありましたし、会社にお世話になったぶん迷惑がかからないように、一年の間、引継ぎと事務処理をし、震災より六年が経った四月に、実家のうなぎ屋を継ぐため西宮の地に戻ってまいりました。

●感謝の気持ちで、誇り・喜びを次世代に

現在、実家に帰りうなぎやの家業を手伝い始め、三年と半年の月日が経っております。やはり震災の余波、経済情勢の影響もあり、商店街も震災前の半数の店舗となっております。外部環境も、大型店の進出や、震災後空き地となっていた場所へマンション建築が進むなど、商店街には向かい風となる状況は数多く出てきております。

そんな中、なんとしても状況打破に向け、商店街の活性化をめざし一丸となってがんばろうと、岡山理事長はじめ、役員の方々の必死の努力が続けられております。昨年、私も若い力が必要だと役員の方々からのご要望を頂戴し、商店街の役員にさせていただきました。また、なんとしても父母が築いてまいりましたこの店を守りたいとの思いで、市商工課の方々、商工会議所の皆様方に相談させていただく中で、たくさんのご指導を頂戴し、少しずつではありますが、店の改善・新しい商品の開発・お客さんの拡大の実績が上がってきております。私が小さい頃は、この西宮

中央商店街は阪神間においてトップクラスの賑わいある商店街でした。子ども心に毎日賑わうこの町に、誇りと喜びを感じておりました。この町に生まれ、この町で育てていただいた感謝の気持ちを忘れずに。そして、私達の次世代の子ども達が、この町に生まれ育つことを誇りに思い、喜びを感じてもらえるよう、私達が親から伝えられた心を伝えていけるように。震災から十年を数えた今日、また新たな強い決意のもと、商店街の発展、店の発展を目指し、皆様のご指導を頂戴しながらさらなる努力と挑戦をしてまいります。

地域復興に奔走する父の姿

ペット雑貨 ふるふる

(西宮市北口町1-1アクタ西宮西館225)
二代続いた老舗の呉服店から、震災を期に長男・祥人氏を後継者とするペット雑貨のお店へ業種転換。「ペット雑貨 ふるふる」として、2001年春オープンの「アクタ西宮」内に店舗を構える。父・晃氏は、西宮アクタ振興会会長であり、元・西宮商工会議所議員、元・西宮市商店街連合会会長など公職多数。震災後の仮店舗「ボンテリカ北口」、その後の「アクタ西宮」建設にあたっては、地域の商店主の意見集約に尽力された。

●呉服からペット雑貨へ業容を転換

私は現在、アクタ西宮でペットショップを経営しております。震災前までは、祖父と父



ペット雑貨 ふるふる 店長 古塚 祥人氏

で呉服店を経営しておりましたが、阪神淡路大震災で店舗が全壊してしまい、祖父が震災後半年で亡くなるなど不幸が重なり、今後の展望を考えなくてはならなくなりました。父は若い頃から地域で民生委員や青少年愛護な

どさまざまな会の役員を務めており、自分達の
ことよりもまず地域の復興に力を尽くした
いとの意向でした。父がそのように考えられ
たのは、店舗は全壊したものの、自宅の方が
助かったということもあったと思います。

そこで店の経営を私に譲ろうと考えたので
すが、私に呉服の知識が全くなかったために、
呉服屋をやめて今のペット雑貨に業種を変え
ることにしました。それまで、私は他社で雑
貨の販売の仕事をしておりましたので、その
経験を活かすことができました。「アクタ西
宮」のオープン時にテナントとして入居・開
店し、おかげさまで今日まで営業をさせてい
ただいてます。

●再開発に力そそぐ

もともと西宮北口の北東地区には市場が2
つと商店街が1つあったのですが、震災でそ
のほとんどの店舗が全壊してしまいました。
店舗の2階を住居として暮らしておられた方
も多く、父はよく知っている方々が避難所で
不自由な生活を強いられていることを、黙っ
て見ていらなかったのでしょうか。それから
というものの、毎日のように避難所へ行って皆
さんの話を聞いては、市や県へ陳情し、地域
での話し合いには必ず出席し、また避難所へ
行って皆さんの意見を聞くという日々を送っ
ていました。

そのうち、市場・商店街には仮設の店舗が
建ってゆき、北口北東地区の再開発の話が出
てきて、地域の代表を父が務めることになり
ました。私から見て気になったのは、震災前
と比べて父のお酒とタバコの量が増えたこと
です。私達には愚痴一つ言わなかったのです
が、かなりストレスが溜まっていたのだと思
います。最初は市が主体の再開発の話だった
と思うのですが、あまりにも規模が大きいと

いうことで、住宅都市整備公団での再開発事
業となりました。そして、当時の仮設店舗を
取り壊し、別の場所へ仮設店舗が造られまし
た。それが、「ポンテリカ北口」です。

ご存知の方もおられると思いますが、「ポ
ンテリカ」を反対から読むと「仮店舗」にな
ります。このときも私も「ポンテリカ」に店
舗を出していたのですが、父が忙しくなかな
かつかまらない状態だったので、父への用件
や苦情など私を経由することが多くなり、中
には見当違いのことを言ってこられる方もお
られました。こんな状況で本当に再開発の話
がまとまるのかな？と疑問に思うこともしば
しばありましたが、多くの方々が父のことを
理解して支えていただいたので、現在の「ア
クタ西宮」の建設までこぎつけることができ
たのだと思います。

今回、新潟でも大きな地震がありました。



ふと考えると阪神大震災からもう10年も
経っているんですね。普段は震災のことなど
ぜんぜん考えもしない生活が続いているのに、
今回の新潟の地震が起きたことによって、そ
のときのことが最近のことのように思い出さ
れました。

新潟の方々も、これから大変だと思います
が、皆さんで力を合わせて頑張ってください
たいと思います。

2 あのとき、企業はどう動いたか

企業の危機管理と地域貢献の実践

アサヒビール株式会社

西宮工場 総務部 プロデューサー 吉田 護氏



突然の危機に直面したとき、企業はその真価が試される。阪神・淡路大震災は、まさにそのときであった。多くの企業が大きなダメージを受けながらも、めざましい早さで事業を立て直し、さらには地域への貢献活動を自律的・積極的に行った。アサヒビール株式会社も、そうした志ある企業の一社である。

同社西宮工場（津門大塚町）を訪ね、吉田護プロデューサーに被災時の状況と、その後の対策についてお話を伺った。



●困難を極めた社員の安否確認

「関西に大きな地震は来ないという根拠のない思い込みがあって、大地震への備えはゼロに等しかったというのが正直なところですよ」

と、吉田氏は当時の社内体制の不備を反省する。



<地震でビール瓶が散乱した>

そこへ不意の激震が襲った。昭和2年建設の古い工場は、壁に亀裂が走り、シャッターが曲がって開閉できなくなった。工場内の設備やベルトコンベヤーが転倒。倉庫では、出荷待ちの製品の山が崩れ、罫や缶が散乱、床にガラス片が飛び散り、ビールの匂いが満ちた。屋外にうず高く積まれた空罫も樽も総崩れとなり、見るも無残な状態となった。

「どこから手をつけていいか、茫然としました」

連休明けということもあり、250人いる同工場の社員のうち、出勤していたのはわずかだった。すぐ近くの社宅から6名の社員が駆け付けた。とにかく、社員の安否確認が先決だ。電話に飛びついたが通じない。道路がふさがっていて車では走れないので、自転車とバイクを使い、2人×3班に分かれて社員の自宅を訪ねて回った。

最終的にすべての安否を確認し終えるまで

には、1週間を要した。社員は全員無事だったが、社員のご家族と関連会社で13名の尊い命が犠牲となった。同年3月17日、同工場ゲストハウスで、合同慰霊祭がしめやかに行われた。

●非常に早かった生産復旧

幸いだったのは、建物の構造自体には大きな被害がなかったことだ。生産設備の復旧を急いだ。

「とてもありがたかったのは、ふだんからお世話になっている資材・原材料・設備関係のお取引先から、『ぜひ協力させてください』と申し出ていただいたことです。のべ4500人の方々が昼夜を分かたず復旧活動を行っていただき、大いに助けていただきました」

取引先の支援のおかげで、1月下旬にはラインが稼動。早くも2月上旬から徐々に生産に入っていくことができた。取引先との平素からの信頼関係の大切さを実感した出来事だった。

●給水をはじめ地域を支援

ビール工場といえば、原料の「水」は大量の貯蔵がある。同社はこれを、地域のために惜しみなく供給した。工場正門前で給水を



<西宮工場内ゲストハウス>

行ったほか、人工透析のため宮本クリニック（産所町）に1日2トン給水車で輸送。また、避難所には、同社の製品であるお茶やビール酵母「エビオス錠」を配給した。避難生活のストレスで、体調を崩されている方もいらっしやると聞いての配慮だった。

また、工場内のゲストハウスのトイレを地域に開放し、震災後は倒壊した近隣マンションの管理組合の会議室として部屋を提供。

非常時の対策マニュアルもなく、自社の復旧だけでも大変な中、これだけの活動ができたのは、常日頃から地域貢献を実践してきた同社の基本姿勢の表れといえるだろう。

●地震対策を次々に強化

震災の教訓をもとに、同社は「大規模地震対策マニュアル」を作成。2004年10月、震災10年を機にこのマニュアルをより実践的に、よりわかりやすいものに改定した。



新マニュアルでは、まず行動基準を「個人がやるべきこと」「会社としてやるべきこと」の2つに大別。そして、ひと目でわかるよう「事業所内で勤務中に地震が発生した場合」

「休日・夜間に地震が発生した場合」などの状況ごとにフローチャート化し、具体的な行動を起こしやすいよう改善している。

また、安否確認に手間取った経験から、「エマージェンシーコール」システムを導入。社員個々のメッセージを電話でセンターに録音し、会社からいつでも聞いて安否を知ることができるようにした。非常時には固定電話や通常の携帯電話が不通になる場合があるため、衛星携帯電話を各事業場に1台ずつ配備し、万一の事態に備えている。

さらに、毎年1月17日前後には防災訓練を実施。震度6以上の大規模地震が発生したとの想定のもと、安全・迅速に避難できるよう訓練が行われている。

●震災遺児のためのボランティア活動

アサヒビールでは、震災10年を経た今も、震災で親を亡くした子ども達のためのボランティア活動が続いている。「イルカセラピー」という、水中でイルカと触れ合うことによって心の傷をいやそうというプロジェクトだ。1999年から毎夏10数名の子ども達を招き、アサヒビールグループの社員のボランティア15名が参加。社員の募金に会社からの補助を加えて運営に充てている。

「このプロジェクトは社員に大好評で、参加者を募集するとすぐに定員が埋まってしまうんです。子ども達を元気づけるつもりが、皆、逆にイルカと遊ぶ子どもの笑顔に、感動の涙と元気をもらって帰ってきています」

* * *

●「酒ぐらルネサンス」への協賛

その他の地域貢献活動としては、年2回西宮工場内で「お客様感謝デー」を開催、地元

との交流の場を育ててきた。2004年からは「酒ぐらルネサンス」への参加という形に変え、西宮神社を舞台に、地元の協賛企業とともに地域イベントを盛り立てている。

このように、アサヒビールでは災害の教訓をもとに、種々の具体的対策を行っている。また、地域への貢献活動も、一企業市民としてさまざまな形で日常的に行われている。こうした企業姿勢が、職場の安全を確保するのみならず、社員の士気を高め、地域の人々の共感と信頼を得、最終的には企業ブランドの向上にもつながっていることを実感した。企業の危機管理と地域貢献を考える上で、大いに参考になるモデルである。



＜西宮酒ぐらルネサンス開催時に工場内でも地域住民とふれあいを深める＞

3 震災復興シンポジウム

～地域産業の創造的復興と

新しいまちづくりシステム～

2004年9月1日 ノボテル甲子園（西宮市）

(1) 基調講演「創造的復興一次代へのメッセージ」

財団法人阪神・淡路大震災記念協会理事長 貝原 俊民氏

■はじめに

●講師プロフィール

昭和31年東京大学法学部卒。自治省を経て昭和55年兵庫県副知事、昭和61年から平成13年7月まで4期にわたり兵庫県知事を歴任。現在、財団法人阪神・淡路大震災記念協会理事長、学校法人行吉学園理事長兼学園長、政府地方制度調査会委員、NPO法人日本防災士機構会長ほか公職多数。神戸市在住。

早いもので、もう震災から10周年を迎えることになります。西宮市でも甚大な被害が発生しました。ここに改めて被災者の皆様方に心からの御見舞いを申し上げますとともに、亡くなられた多くの御霊の安らかならんことを衷心よりお祈りする次第です。

さて、震災10周年を迎えて、私のところに今の復興状況をどうみているのかというお尋



ねがよくあります。外から来られた方は、「震災以前より街が良くなった、素晴らしい復興だ」とおっしゃいます。確かに街並みは、政府をはじめ多くの皆様方のご支援をいただいたおかげで、前より美しく綺麗になっているかもしれません。

しかし、そのたびに私は、「おっしゃるとおり『復旧』については120%できているのですが、『復興』という観点からみると道半ばなのではないか」とお答えしています。街並みが美しくなっただけでは、私たちの生活は真に豊かになりません。ですから、創造的復興を成し遂げなければならないということを常に申し上げてきました。

これは、私だけが申し上げていることではありません。震災が起こった1995年(平成7年)9月に開催された「阪神・淡路地域復興国際フォーラム」でも指摘されています。フォーラムは二日間の日程でしたが、海外からの参加者は6月に現地の実態をつぶさに調査するなど全員が十分な研究をしたうえでの意見交換であっただけに、地についたものでした。

このフォーラムにおいて、基調講演者の一人であったアメリカのIPA(ニューヨーク行政研究所)のデイビット・マメン所長が、「私たちが感じるころでは、大震災を好機として活用して復興するためには、新しい見地を導入することや新しい枠組みを作ることによって、以前より良い状態にすることが必要でしょう。しかし、今ひたすらに努力されているのは、以前の状態に戻る復旧の方向ではないか。このままでは完全な復興にはならないことを懸念します」と述べられたのです。

私どもも、震災以前から、わが国が曲がり角に来ていることは実感していました。日本は第2次世界大戦後、非常に若い社会であり、1945年(昭和20年)の高齢化率は1桁でし

たが、今では少子高齢社会に入り、発展途上国から経済先進国の仲間入りも果たしました。成長する社会から、成熟した社会になりつつあるなかで、国民の価値観も、これまではモノが大切だという意識が強かったのですが、今ではモノより心の豊かさが大切だという方が多くなっています。そして、今まではお互いが権利を主張しあう権利要求社会でしたが、様々な分野で大きくなる責任をどのように分担していくかが問われる責任分担型社会に入ってきています。

過去50年、日本は国際社会の中で平和を享受してきましたし、突発的な自然災害も阪神・淡路大震災まではありません。しかしながら、いつまでもこういった天下泰平の時代が続くことは、人類の歴史上からみても稀有なことです。成熟した社会では、人工的で複雑にからみ合った基盤の上で生活や産業が成り立っていますから、災害時に受ける危険はむしろ増しています。また、価値観も変化し国際化も進むと、今までの安定した社会が不安定な時期に入ってきます。ですから、先ほどのマメン所長のお話のように、今までの仕組みの延長線上での「復旧」ではなく、「創造的復興」をめざしていかなければいけないという思いを強く持っていました。

しかしながら、日本の社会システムは「復旧」にはうまく機能するが、新しいものをつくって「復興」していくということになりますと必ずしもうまくいきません。その典型が官主導型の中央集権システム、あるいは今の単年度予算システムです。

阪神・淡路大震災のとき、官側のシステムは硬直した状況であり、期待されるほどの仕事が出来ませんでした。しかし、市民の皆様は今までと違った考え方で行動され非常に高く評価されたのです。まさに先ほど申し上げました「官主導型」の社会が「民自律型」の

社会に変化していることを如実に示したと思うのです。先年亡くなられた司馬遼太郎さんが、震災直後の被災地の状況を、“世界でただ一つの神戸”という題で次のような一文を神戸のタウン誌に寄せられ、被災者を激励されました。

「家族をなくしたり、家をうしなったり、途方に暮れる状態でありながら、ひとびとは平常の表情をうしなわず、たがいにたすけあい、わずかな救援に、救援者が恥じ入るほどに感謝する人も多かった。（略）

扇動する人も、登場しなかった。たとえそんな人がいても成熟した市民を感じさせるこの人達は、乗らなかったろう。えらいものだった。

この精神は、市民個々が自分の暮らしを回復してゆくことにも、きっと役立つにちがいない。」

司馬さんらしい文明史的な視点から、被災者の行動に対して高い評価をされています。震災という非常時に何でも官に頼むのではなくて、自分たち自身が冷静に自律的な行動をされる、そんな市民社会がもう被災地という現場の中で現れていることを指摘されているわけです。



■危機管理の再構築

では、創造的復興がまだ道半ばであることについて、一つ一つ具体的に検証してみたいと思います。

まず「危機管理の再構築」についてです。21世紀ソウル研究センターの韓泳秦部長が、次のようなことを論評しておられました。

「阪神・淡路大震災によって、多くの日本国民は、国家に信頼すべき危機管理システムが備わっていないということを認識することになった。」

私どもを含めまして、行政の責任者は本当に深い反省をしなければなりません。なぜこういうことに日本はなったのでしょうか。少なくとも第2次世界大戦まではこういう状況ではなかったはずです。日本は周辺国との戦争も経験していましたし、厳しい国際環境の中で国家運営がなされていました。明治憲法下においては国家の存立が大命題でしたから、それを脅かす危機に対しては、内政・外交とも大変な努力をされたわけです。また国民も自分の命が明日にはどうなるかわからないわけです。特に戦争末期においては現実に爆撃

を受けたわけですから、防空頭巾や三角頭巾をつくったり、あるいは消火や避難はどうしたらいいかを確認したりするなど、日常生活の中で危機管理をしていたわけです。

ところが、第2次大戦後、わが国は米ソの冷戦構造の緊張した中で、国際紛争にまきこまれることもありませんでした。平和憲法を旗印にひたすら経済発展に努

め、世界から注目される経済成長を達成したのです。しかもこの間、突発的な自然災害も発生しませんでした。こういう状況で、危機管理への意識が退化していったのではないかという気がしてなりません。

私が知事に就任しました1986年（昭和61年）は、まさに日本が経済先進国の仲間入りを果たしたことを自他共に認めた頃でした。英米独仏と日本による先進5ヶ国が世界経済の運営を調整するために設置した蔵相会議（G5）もこの時期に始まっています。今までのような経済発展だけを志向するのではなくて、先進国としての社会構造への転換を進めなければならなくなりました。また、国際的にも、先進国として一定の責任を果たすことが期待されることとなったのです。

このような時代認識に立って、私は、県政の中心理念を「こころ豊かな兵庫」の構築におき、全力で取り組んでまいりました。その時に当然、危機についても大きな変化があることを認識すべきであったのですが、このことにどれだけのエネルギーを費やしたかを振り返ると、残念ながら、反省すべき点が多くあります。

では、今後どうなるのでしょうか。東アジアは台湾問題、北朝鮮問題を抱え不安定な地域の一つだといわれています。自然災害についても、阪神・淡路大震災を契機として日本の地震帯が活動期に入ったといわれています。確かに、阪神・淡路大震災以後、鳥取や三陸沖、北海道沖などで地震が起こっていますし、東海・東南海地震などの海溝型の地震が近い将来必ず起きると予測されています。

また、地球環境の変化により、今までなかった異常な気象が発生していることもご承知のとおりです。先日、新潟・福井の豪雨がありました。雨の降り方は今までと全然違うそうです。ヨーロッパでは非常に夏が暑く

なり、フランスで沢山の高齢者が亡くなりました。また、ほとんど水害のなかったところが300年来の大洪水になったり、中国では乾燥が進んで黄河の水が消えてなくなる危険があると指摘されています。

さらに、自然災害以外に、人為的な災害が私達の生活の脅威になっています。21世紀に入って初めての年に発生したアメリカの同時多発テロ。ほかにも、新型肺炎（SARS）や高病原性鳥インフルエンザなど、豊かな生活を営むために科学技術が発展すると、逆にいろんな危険をもたらします。

たとえば水道も、この西宮を含めて、近畿2,000万人のうち約1,000万人が琵琶湖の水に依存しているわけですが、琵琶湖に誰かが生物兵器あるいは化学兵器を使って水を飲めなくしてしまうことだってありえます。あらゆることを想定して危機管理をしっかりと行いなければいけないのです。これも「創造的復興」の一つとして、今までと違った形でわれわれが考えていかなければいけないことです。

危機への備えといった時に、私たちが誤解しがちなことがあります。それは、川が氾濫しないように河川改修する、堤防や防波堤をつくって高潮に備える、あるいは地震に備えて建物の耐震構造を強化することで災害が起きないようにするハード災害対策に重点をおきがちなことです。一般的にいう「防災」、災害を防ぐという考え方です。しかし、社会が成熟化し、非常に複雑・高度な生活を営むようになってきますと、災害はいろんな形で起きますから、すべての災害を防止することは、もちろんその努力は必要ですけれども、不可能に近いといわねばなりません。

そうであるならば、発生した災害の被害軽減をめざすべきです。これは「減災」という考え方です。被害は発生するものとして、そ

れ以上被害を拡大させないための対策、できるだけ早く社会の安定を取り戻すための対策など、ソフト災害対策といわれるものが今後は大切なのではないのでしょうか。そのことが、創造的復興にあたって私たちが心得るべきことではないかと思います。

■市民防災

危機が発生したときに、公的な機関が一義的に責任を負うことは当然です。しかし、これに限界があることも、阪神・淡路大震災で私たちは認識しました。

先の大震災で、公的な機関である消防・警察・自衛隊は、どの程度、救命救助活動にあたることができたのでしょうか。

まず、消防についてみると、同時多発の火災に対応できる能力は、西宮市で3件、神戸市で10件程度といわれていますが、発災直後の1月17日午前6時の段階で、西宮市で11件、神戸市で60件の火災が確認されています。市民の皆さんが119番をしても消防が来ないという状況になってしまったわけです。

警察については、激甚災害の指定を受けた10市10町に配置されていた警察官の定数は約5,000人。このうち当直勤務者が約1,200人でした。「地震が起きたから、直ちに警察官出動」といっても、全壊世帯・半壊世帯合わせて46万世帯という大きな被災ですから、1,200人の警察官ではなかなか市民が期待されているような救助活動はできませんでした。

こういう大災害の場合、自衛隊の救助活動が頼りになるのですが、近畿2府4県を所管する陸上自衛隊第3師団は約7,000人です。このうち兵庫県を担当しているのが、伊丹の第36普通科連隊と姫路の第3特科連隊の各600人ずつですから、合わせて1,200人。兵庫

県で震災が発生したとき、第一次に出てくるのはこの1,200人しかいないわけです。もちろん、全国からの動員も可能ですが、中部から近畿、中国・四国を担当する中部方面総監部全体でも約2万人だといわれているのです。これは大規模災害だから「第3師団7,000人を全員出動させよ」といわれても、第3師団としてはその災害が兵庫県だけで起きているのか、所管している近畿の他府県でも起きているのか、全体が把握できないと全部隊を兵庫県に集中させる決断ができません。実際、いちばん大きな被害を受けたところは、助けてくれという声も出せず、比較的被害の軽いところほど声を早く出すことができるのです。師団長はあの1月17日、停電をしている真っ暗な状況の中で、2府4県のどこにどんな災害が起こっているのかについて全部把握しなければなりません。ところが、各府県庁に電話をしても誰も人がいません。災害担当者と連絡がつかない状況で、司令部も混乱を極めたわけです。あのとき知事の出動要請が遅かったといわれましたが、それで遅くなったわけではありません。自衛隊はそんなに早く動けないのです。重装備なので、出動するのに3時間から4時間はかかります。このように、消防や警察、自衛隊は、市民が期待するほどの活動ができなかったのです。

阪神・淡路大震災によって家屋に閉じ込められた被災者や被救出者について、その正確な数は把握されていませんが、京都大学防災研究所巨大災害研究センター長で、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター長も兼ねておられる河田恵昭教授が、各種のデータに基づき、その概数を推計されています。

震災発生時、家屋に閉じ込められた被災者総数は16万4,000人程度。このうち、自力で脱出した人が約8割の12万9,000人。他の方から助けてもらった方が、約2割の3万5,000

人。うち、消防・警察・自衛隊など公的機関によって救助された方が、7,900人。家族を含む民間人によって救助された方が2万7,100人です。

つまり、救助された人のうち、5%弱しか公的機関によっては救助されていないということになります。だから公的機関はけしからんということになるのか、これを現実として受け入れざるをえないと判断するのか、これは私どもが今後判断すべきことでありますが、現実はこうなっていることを阪神・淡路大震災のときに思い知らされました。

そういうところから考えてみますと、危機管理体制は自らの責任で自らを守る「自助」が基本。そして、個人の力では命を守れないとき、家族や近隣に住んでいる者同士、ボランティア、あるいは企業が、お互いに助け合って危機を脱する「共助」。そうはいいまして素人集団ではどうにもならない、やはりプロでないとダメだという場合が当然あります。そういうところは、消防や警察・自衛隊がきちんと担当すべきなのです。

ここで、一つ皆様方にお考えいただきたいことがあります。先日の神戸新聞に、神戸市の消防局が阪神・淡路大震災の経験をもとに自分たちのマニュアルをつくっているが、それを公表できないでいるという記事がありました。どういうことかということ、震災が発生し、消火活動の出動命令が出たが、近くに生き埋めになっている人がいて、必死に助けを求めている。その消防署員は、目の前の生き埋めになっている人を助けようと、出動を見合わせてそちらの救助活動に従事した。これが許される行為かどうかということです。

目の前に亡くなられようとしている人がいれば、まずそちらを救助したいという気持ちはわかります。しかし、火を消さなければ大火になって、もっと多くの犠牲が出るかもしれ

れません。冷静に考えると、消防署員は自分の使命にしたがって消火活動に従事すべきです。このように考えてマニュアルをつくっているわけですが、果たして市民の皆さんがそれで納得していただけるのかどうか自信がないものですから、公表できないでいるという新聞記事でした。

どういう行動をとるべきなのか、たいへん悩むところです。しかし、危機管理体制の基本は「自助」です。それでもできないことは「共助」でやる。「共助」でもできないことはプロに任せるという考え方をしますと、消防は火を消すプロですから、火を消すことに全力を挙げるべきだということになると思います。しかし、情緒的にはなかなかそこまで割り切れません。このことは、「危機管理体制が大切だ」と口先で唱えているだけではすまない、危機管理体制に対する厳しい問いかけだと思います。

「共助」といえば、震災以降「コミュニティ」について、いろいろな議論がなされています。都市は華やかで快適な生活空間ですが、何よりも魅力的なことは、周囲の人にあまり干渉されずに自分のやりたいことをやれるという自由さにあります。ですから、都市のライフスタイルはどうしても核家族化していきます。家族の中の親子、夫婦間でさえ、人間関係の煩わしさを減らして、個人の権利を大切にしていこうということになっています。そうしますと、ハード面で人工的な環境のもろさがあることに加え、ソフト面でも人間の助け合い、共助のしくみが薄れてきます。そのなかで、どうやってコミュニティを育てていくかが大きな課題なのです。

私もずっと地方自治の仕事をしてきた者として大きな責任を感じているのですが、日本は戦後50年、コミュニティについても徹底的に排除してきた歴史があります。

年配の方はご存知のとおり、戦前のわが国には、向こう三軒両隣という隣保組織がありました。自分たちの命を守るための防犯・防災も盛んにやっていたのですが、結果的には戦争遂行の協力機関になった封建的な組織だということで、戦後は徹底的に排除されました。

法律においても隣保組織は位置づけがなく、法人格も認められませんでした。日本が成長盛りの若い時期はお互いみんな元気ですからそれで良かったわけです。しかし、成熟した高齢社会に入ってきますと、たとえば地域の環境を守ること、高齢者の福祉、子どもたちの教育、地域の防犯・防災については、個人ではできない部分を地域で守っていく「共助」のシステムが必要ではないかという意識が強くなっています。

戦前のような隣保組織を復活させるのではなく、地域のいろんなボランティアグループが活動しやすいように法整備をすべきなのではないでしょうか。私も政府の地方制度調査会委員として、「地域自治組織」をつくることができるように提唱し、法律改正がこの4月に行われました。防災だけに限らず、福祉や環境、教育などを含む市民生活の安全・安心を確保していくために、こうした組織体の活動が重要であると考え、その活躍に期待しています。

■新しいまちづくり

巨大都市についての国連の統計によると、1975年の時点で人口1,000万人以上の都市は、東京・ニューヨーク・上海・メキシコシティ・サンパウロの5都市だけだったそうです。ところが2015年には21都市に増え、大阪もその一つに数えられると予測されています。都

市には魅力があり、豊かさを手に入れる機会がありますから、都市への人口集中は将来も避けられないでしょう。

しかし、私どもは阪神・淡路大震災のときに、都市が非常に脆弱であることを痛感しました。都市は大きければ大きいほど、自然災害・人為災害による危険が増します。また、都市はハード面だけでなく、ソフト面でも人間同士のつながりが希薄になってきますから、いったん災害が起きたときには大きな被害になりやすいのです。20世紀都市文明を問い直し、人類の英知を結集して、21世紀の成熟社会にふさわしい都市文明を創造していくことが、「創造的復興」の一つの大きなテーマだと思います。

20世紀型の都市は、人口が多い都市、経済的に発展する都市が良い都市でした。どこの街並みもみんな同じような風景です。これは規格化によってコストが安くなるためです。典型的な例が公営住宅です。全国どこでも同じようなスタイルの住宅になっています。学校や公園も同様で、そこに住んでいる人を疎外するような構造になっているのです。21世紀の都市はそうではなくて、住んでいる人を中心にしたまちづくりをしていかなければいけません。そこで、私どもは「人間サイズのまちづくり」を理念として掲げました。

たとえばパリは、10階建てぐらいの建物の1階が商店やレストラン、2階3階がオフィス、それ以上がアパルトマンと呼ばれる住宅になっています。そういう街区がずっと続いて大都市パリができあがっています。パリの人たちの生活を見ますと、日本人と違うのは、自分のアパルトマンの中に自分の必要なものをすべて揃えるという考え方をしていません。日本人は家を建てるときには、ベッドルームはもちろんですが、炊事場、お風呂、食堂、居間、応接間、書斎といった生活に必要なすべ

ての空間をゼンブ家の中にそろえます。ですから、一戸一戸が独立してしまって、隣の人は何をしているのかわからないということになってしまうわけですが、パリのアパートマンにあるのは寝室プラス若干の居間ぐらいです。お客さんを迎えて食事をするときは、その街区のレストランを使いますし、子供たちの勉強は、そこの街区にある図書館を使うのです。庭も、そこの街区の都市公園を自分の庭として使っています。公共空間を自分の生活の中に取り入れたライフスタイルになっているのです。考えてみますと、落語に出てくる江戸の下町もそんな感じです。

震災後、「コレクティブハウジング」「グループホーム」という考え方が生まれてきました。一棟の家で複数の入居者が、プライバシーを保つため最低限必要な寝室等を除き、居間、炊事場、食堂を共用するという住まい方です。高齢者を中心に、コミュニティを作って安心して生活する上で有効ではないかということで評価されています。さらに、街区全体に公的な空間と、私的な空間をつくり、その間に公的でも私的でもある空間を増やしていくというまちづくりもはじまりました。まさに「マイタウン」であり、公園は自分の庭、図書館は自分の書斎、喫茶店やレストランは自分達の食堂、道路は自分達の生活空間となるのです。そこでは地域住民の方がまちづくりに参加して、みんなで話し合いながら取り組むようになります。そうすると、そのまちに対して「自分達のまちだ」という愛着が高まり、都市のコミュニティも生まれてくるのです。これは、パリの街区の考え方に非常に近いことに気づきます。

復興の都市計画をつくるときに、こういう「マイタウン」づくりが成功したところもあります。一時期は震災復興の都市計画は住む人達の意向を無視して強権的だということで

批判されていましたが、10年経って新聞の論調などを見ますと、協働のまちづくりという理念が活かされてきているという評価に変わりつつあります。しかし、まだまだ十分ではありません。さまざまな規制や課題を乗り越えて、協働のマイタウンづくりを着実に進めていかなければならないと思います。

■新しい産業創造

シリコンバレーにおける産業政策の研究者であるカリフォルニア大学のアナリー・サクセニアン助教授が、私どもの産業復興政策について次のような意見を述べられています。

「意図的に計画されたプランテーション型の産業モデルでは、一部の巨大な自給自足型組織が牛耳っていて、新しい成長の機会に阻まれている。これに対し、自然の法則の下、植物も動物も他種との交配を繰り返しながら、日々複雑に多様化する熱帯雨林のように分散化されたネットワークシステムの産業モデルは、とどまることのないような速さで変貌する環境の中で真に力を発揮する。」

確かに、日本がかつての発展途上の段階で先進国に追いつけ追い越せという時代には、一つのモデルをつくり、官僚主導型の護送船団方式により乏しい資源・人材・エネルギーをつぎ込むことが非常に効率的でした。しかし、日本も経済が高度化し、国際競争の中で生きていかななくてはならない時代になると、そんなことをやっていたのでは激しい変化についていけません。官主導ではなく、それぞれの企業体が自分達のやりたいように創意工夫をして、その中で成功したものがネットワークしていくのが望ましいのであって、官庁が規制し、業界団体が自主規制して護送船団方式をとると、非常に脆弱な産業構造に

なってしまうと、外部との競争にさらされたらたちまち衰退してしまうことになります。神戸は港を中心として発展してきましたが、これまでのように、官僚が経済計画を立ててそれに資金を導入していたのでは、香港やシンガポール、釜山などとの競争に負けて地域全体がダメになってしまいます。ですから、それよりも、民間企業の皆さんの創意工夫を徹底的に大切に、いろいろなベンチャーがトライするエネルギーをかきたてるような産業政策をすべきだということです。

私どもも、震災直後、自由な企業活動を助長する「エンタープライズゾーン」構想を提唱しました。これは欧米や中国などでも実施されている政策で、これをぜひ実現したいと願っていましたが、政府は日本の法制上1国2制度は認められないということではなかなか取り上げてくれませんでした。しかし、その後、沖縄について特区を認めようという考え方が橋本内閣のときに出て、小泉内閣ではいろんな特区構想が取り上げられるなど、ようやく時代が変化してきています。

それでは、特区をつくって何をやるのでしょうか。サクセニアン助教授は、成熟した先進国がコスト競争をすると、人件費の安い発展途上国に負けてしまいますから、先進国では高コストであっても競争に勝てるような産業構造をめざすべきだといわれました。これからの日本は、安全である、環境に優しい、健康にいい、福祉力が高い、芸術性が高いといった付加価値を高めていくべきでありましょう。

トヨタの会長がテレビ番組の対談で、トヨタがなぜ厳しい世界の自動車産業の競争の中で高い評価を得ているのかというと、それはひとえに、環境問題に対するトヨタの取り組みが非常に先進的であるからだとおっしゃっていました。トヨタの戦略としては、これか

らも最大限自分達の企業の価値を高め、それによって、世界の自動車産業との競争に勝ち抜いていくということです。

私も、熱帯雨林型の産業構造をつくり、その中から高付加価値の新しい産業を創造していく方向に進むべきではないかと思っています。

県政としましても特区制度を活用して、「神戸東部新都心」「神戸医療産業都市構想」など、環境・福祉・健康・医療分野における国際的にも最先端の研究開発を行う都心機能をつくっています。そのためには当然、国際的な交流がなければなりませんから、外国人の居住環境の整備はもちろん、西宮の「芸術文化センター」や美術館、空港港湾のアクセスなどの基盤づくりを進めています。このような国際交流基盤の整備と規制緩和を行うことによって、熱帯雨林型の産業構造がこの地で創造できるに違いありません。

その芽として、神戸東部新都心には、「WHO神戸センター」、「国際エメックスセンター」、「アジア防災センター」などの国際機関が立地していますし、神戸医療産業都市構想では、中核施設として「先端医療センター」、「理化学研究所発生・再生科学総合研究センター」などが完成し、ライフサイエンス分野の基礎研究や橋渡し研究、起業家の支援や人材育成が進められています。ここから、日本人が持つ非常に繊細で高いレベルの技術・資質を活かした高付加価値産業が生まれることを期待しているところです。

■おわりに

イギリスのサッチャー元首相が、神戸に震災前後に2回お越しになり、私もお会いしていろいろお話をさせていただいたのですが、

「国家統治論」という著書の中で次のようなことを書いておられました。

「神戸にとって主要な問題は、震災後の再建ではなく長引く日本経済の不況であった。日本は迅速かつ弾力的に反応することが困難なのが実態である。このため日本は突発する危機に驚き混乱するのである。しかし日本は静かに耐えており、日本人は決して困難な事態に対処する勇気を失っていない。彼らは種々の可能性を熟考し、相談し、それから定められた目標を達成するため英雄的努力をもって前進する。これこそ日本人が成功し、将来も

成功し続けるであろう理由である。」

サッチャー元首相は日本人の考え方、行動を高く評価されています。私も日本人はすばらしい資質を持っていると思います。これを活かしていくならば、市民防災、危機管理、まちづくり、産業創造など、さまざまな問題を力強く乗り越えて必ずや復興できるに違いありません。10周年を迎えてまだ道半ばでありますから、もっともっと努力していかなければならないと思っています。

最後までご清聴いただき感謝いたします。
ありがとうございました。



アクタ西宮全景



プレラ西宮

(2) シンポジウム

「地域産業の創造的復興と新しいまちづくりシステム」

コーディネーター 武庫川女子大学名誉教授 柿木 健一郎 氏

○シンポジスト

西宮市長	山田 知氏
西宮商工会議所会頭	辰馬 章夫氏
西宮市商店市場連盟会長	田窪 敏二氏
アサヒビール株式会社執行役員・西宮統括工場長	三谷 昌氏
浜脇連合婦人会会長	二見 治子氏

○アドバイザー

財団法人阪神・淡路大震災記念協会理事長
貝原 俊民氏

に、古いものでも良いものはますます盛んにするのだと考えますと、「創造的復興」というのはいい言葉だなと思った次第でございます。

貝原さんのお話を踏まえますと、「創造的復興」とは新しい見地、新しいシステムによって地域産業を大いに振興して、新しい活気のある街を創るということであろうかと思えます。ただ商品が飛ぶように売れるだけでなく、震災の時に私たちが経験しましたように、お互いに信頼し助け合って、街を行く人の顔がイキイキしている、街に出会いの喜びがあふれている、そういう街を創るために産業を振興しよう、そのためにどういうシステムが大事かを考えよう、という主旨だと考えております。

さて、震災によってどんな衝撃をお受けになられたのか、はじめに西宮市長の山田知さんにお話をいただきます。震災時には教育長

■震災の衝撃と復旧・復興への道

柿木 第1部で、前兵庫県知事でいらしゃいます貝原さんの、非常に内容のある展望のあるお話をいただきました。この基調講演を受けて、第2部のシンポジウムに入らせていただきます。実は今回のテーマにある「創造的復興」という言葉で悩んでおりました。「創造的」という言葉と「復興」という言葉は矛盾しているんじゃないかと。そこで、国語学者で、言葉の名探偵であられました金田一京助さんの本を広げ、そして先ほどの貝原さんのお話をうかがって、疑問が氷解いたしました。

「創造」とは「今までにない新しいものや独自の物を創り出すこと」とあります。新しいものをどんどん創り出すとともに



でいらっしかったです。児童や生徒の安全安心の問題について非常に苦慮されて、それが今日の山田市政の原点になっているように思います。

山田 当時私は教育長でございまして、真っ先に市役所に到着し、避難所の開設・運営、学校園や社会教育施設の応急対策・復旧などに昼夜の区別なく努力をさせていただきました。震災で亡くなられた方は1,146人、家屋の全壊3万4,000所帯、半壊2万7,000所帯。全所帯の40%に当たる約6万1,000所帯が、全半壊の被害を受けたわけでございます。特に心が痛みましたのは、いたいけない子ども達が多数犠牲となり、肉親を亡くし家を失ったことであります。市立学校園の児童・生徒で亡くなったのは、幼稚園1人、小学校35人、中学校20人、合わせて56人にもなりました。両親とも亡くなった子どもが5人、父母いずれかが亡くなった子どもは41人……子ども達が犠牲となったことは本当に辛く悲しいことで、私が重点施策の一つとして取り組んでいる「子どもの笑顔輝くまちづくり」も、こうした思いから生まれたものでございます。

震災後9年半が過ぎ、皆様のご協力のおかげで、本市の震災復興事業も仕上げの段階を迎えましたが、まちの賑わいのためには産業の振興が重要であり、本市の重要施策として「都市型観光の推進」に取り組んでおります。ご承知のように、西宮は製造品出荷額の8割近くを酒造業をはじめとする飲食料品が占めるという特色がございます。西宮の産業再生戦略をもとに、酒蔵地帯には酒文化を活かしたミュージアムやレストラン・ショップが続々とオープンし、甲子園球場から酒蔵通り・夙川を結ぶ「L字型観光ルート」が賑わいをみせております。平成13年には酒蔵地帯が環境省の「かおり風景100選」に選ばれるなど、歴史的・文化的な観点からも本市の

貴重な財産であり、市も「酒蔵通りリニューアル事業」として、「酒のまち西宮」を案内する観光サインや、太陽電池を利用した街路灯の設置などを進めております。さらに、西宮酒造家十日会・西宮商工会議所・市による「酒ぐらルネサンス」は、地元に着した祭りとして年々賑わいを増し、昨年は参加者が10万人を超え、8回目を迎える今年も、10月に西宮神社を会場に開催する予定となっております。

西宮にはお酒以外にも、市内に洋菓子店が約100店舗、フランス・イタリアコノママのレストランが約50店舗ございます。そこで、「洋菓子園遊会」や、イタリア・フランス料理店が共同でサービスする「グルメ西宮リエゾン」、「和菓子まつり」など幅広く西宮の「食」の魅力をアピールしてまいりました。こうしたイベントを継続することによって年々参加者が増加し、また新しい企業に参加いただくことにより、産業振興が促進されることを目指しております。

これからも西宮の新たな観光資源に光を当てて、住む人にも訪れる人にも魅力や愛着のある、「住んでよし、訪れてよし」のまちを実感していただけるよう取り組んでまいります。今後は西宮の産業情報をインターネットなどを通じ全国・世界に発信していくことに力を入れ、環境に優しい産業など西宮の特性に合わせた産業の育成・振興について商工会議所との連携を図っていく必要があると考えております。

柿木 続きまして、アサヒビールの三谷様にお話を伺います。震災時、アサヒビールは工場の復興、社員の安全はもちろん、地域への支援にも目覚しい貢献をしていただきました。三谷 当時の状況を振り返って見ますと、早朝でございましたので順次、社員が出勤し、最終的には半数ぐらいの社員が徒歩あるいは

バイクで出勤してまいりました。まずやりましたことは、連絡のつかない社員、OB社員の安否と被害状況を確認することです。2人1組で単車で回りました。すべての安否確認を取るのに約1週間を要し、後に大きな教訓を残しました。おかげさまで社員は全員無事でしたが、社員の家族で9名の方がお亡くなりになりました。また、社員の住居も、全壊・半壊あわせて約数十軒に及びました。

工場では、ボイラー等の設備関係は緊急停止を行うことができ、幸い二次災害の発生は防げました。電気は、当日の夕方から受電を開始。ガスは専用の配管ですので、4日後の1月21日に供給がありました。水は1月29日に水道水の部分取水をいただき、最終的に必要量を得たのが2月の中旬からでございます。当時の製造設備、醸造のタンク、配管に大きな被害はございませんでしたが、瓶詰・缶詰の機械は土台から落下し、コンベアー、配電盤は倒壊し大きな被害を受けました。製造は2月上旬から順次再開したという状況でございます。また物流関係も製品や空瓶が大量に倒壊・散乱し、片付けに約2週間を要しました。この復旧作業は、約5800人の協力会社さんに全面的な協力をいただきました。

東京の本店から、当日ただちに社長から2点の指示がございました。1点目が「社員ならびに家族の安全を第一にきなさい」。2点目が「品質最優先、お客様最優先の心に応えるという基本の行動を徹底きなさい」。現地の対策本部長として、営業と生産担当の両副社長が派遣され、現地で指揮をとりました。

地域貢献活動としましては、一つは社員の義捐金に会社のお金を合わせて、日本赤十字社に寄付をさせていただきました。次に、工場内にある3,000トンの給水タンクと、吹田工場からも水をピストン輸送し、近隣の飲料水や病院の人工透析用水を、また神戸市には

水の輸送タンク車をご提供させていただきました。工場内のゲストハウスでは、トイレを近隣の方にご利用いただき、近隣の被災マンションの方々に集会所としてもご利用いただきました。また、西宮市への応援として、2月上旬から中旬まで約130名の社員が各事業場から救援物資の配布等の支援をさせていただきました。

平成11年から「イルカセラピー」というプロジェクトを開始しております。これは、阪神・淡路大震災でご両親などを亡くされて心に傷を負った震災遺児の方に、イルカとふれあうことによって心の傷を癒していただくことを目的としたプロジェクトでございます。毎年夏休みに、約12名の遺児のかたにご参加いただいております。ボランティアとして当社の社員もアテンドし、逆に社員が遺児のかたがたから元気と感動を頂戴しております。ぜひこのプロジェクトは継続してやっていきたいと考えております。

次に地震対策については、個人の役割と会社の役割を明確にいたしました。個人の役割は、自分と家族を守ること。そして自宅の耐震対策、防災の備蓄、家族との連絡対策、居住する自治体の防災情報入手であります。企業の役割は、従業員と会社資産を守ること。そして、事業場内の安全対策ということで、救護救援、防災備蓄、緊急連絡網の整備、近隣への安全対策、二次災害防止、被災地の支援活動を行う。それから、会社資産の保全復旧として、耐震対策あるいは復旧シミュレーションの立案実施、これらを企業の役割ととらえております。また、この大震災の教訓から、本店に危機管理を担当する専門の部署「品質企画部」を設置しました。

柿木 辰馬さんは、辰馬本家酒造株式会社の社長として、地場産業の代表でございますし、また商工会議所はじめ各種団体の責任ある立

場でもいらっしゃいました。

辰馬 震災の教訓というのは本当にたくさんございました。今はデジタル社会でございまして、お互いに顔を合わせなくても、経済や個人の生活が世界の隅々にまで広がっていく相互関係が構築されていますが、逆に家族や隣近所、地域社会は心が過疎化しているということを感じます。お互い人と人とが体温を感じあう触れ合いをふだんから作っておく。これが助け合いの心を生むということを感じました。また、一般的なマスコミの報道だけではなかなか真実が伝わりにくい。独自のネットワークを構築しておく必要があるということを感じました。

何でも基礎をしっかりとしないといけない。継ぎ足し、その場のやりくり、形を整えただけではダメージが大きい。現に、当社の昭和5年の建物、大正6年の建物が、震災にびくともしないで残っているのです。建物も、人間の行動も、何でも基本が大事だと痛感いたしました。それから、樹木が建物の倒壊や火災を食い止めたということで、自然の大切さを感じました。

酒造業は水を大切にしております。水は人類が自分の姿を映し出した最初の鏡である、これを濁らしてはいけないなと感じました。水をご近所の方にも使っていただきまして、たいへん喜ばれました。そして、高速道路が一瞬にして傾いてしまったということをも、技術を過信してはいけないなと。また、心温まるボランティア、助け合いの感銘的な場面がたくさん生まれました。それは、非常に心にとどまっております。

私ども酒屋にとりましていちばん残念だったのは、酒蔵が軒を連ねる風景が消滅したことです。古い町並み、緑豊かな邸宅もほとんど姿を消してしまいました。私は風景は地域にとって大切な資源であると思います。この

ごろ、車に便利のようにばかり開発が進み、そのまち独自の風景が消滅して金太郎飴のようなまちができていくのを残念に思っております。文化の伝承や、郷土のまちづくり、賑わいづくりも地場産業の使命だと思います。酒屋というのは、宮水の保存ということで皆さんにたいへん心にかけていただき、広い土地を占有いたしております。ここには、乱開発を防止するという使命があるのではないかと。原風景のイメージと、新しい発想のものが同居するスポット。先ほど山田市長がおっしゃっていただいたような、酒蔵地帯の「酒のまち」らしいシーンが連なるまちづくりを通じて郷土の発展を願っております。

もう一つは、やはり環境問題。西宮市は環境学習都市宣言をいたしまして、これは非常にすばらしいことです。環境破壊を食い止めるには、命の尊厳を学びあうことが大切だと思います。互いの命を大切にする学習を深めると、傷つけあうことのない平和の心が育っていくのではないのでしょうか。

防災はまちの魅力を高める大きなファクターになってきます。防火・防犯・防災のシステムがしっかりと働いて、市民の安全意識が高揚したところは、安心して住める都市になります。企業の立場から申しますと、企業の安全意識・職場の安全・従業員の安全は、商品力の大きな構成要素になります。いい商品、いいサービスは、安全・快適な職場から生まれてくるからです。

安全の基本要素は「A B C」——「当たり前のこと」「ばかにしないで」「ちゃんとやる」——私どもは、これを社内で徹底しております。このごろ、企業の不祥事がいろいろ起きていますが、品質よりもコスト、安全よりも効率を求めた結果ではないのでしょうか。私達企業はモラルと管理秩序を保ち、「感動を売る」ことを忘れてはなりません。品質よ

りも儲けを優先すれば、消費者の方も、安さや流行に流されて商品を大事にしていけない。するとメーカーはますます手を抜く、という悪循環に陥ってしまいます。危機管理・快適職場は経営そのものであり、震災後改めて忘れてはならないと胆に銘じております。

柿木 田窪さんは、果物小売店の社長として、また当時商店市場連盟の理事として復旧・復興、その後のまちづくりにご尽力なさいました。

田窪 震災から10年経って商店市場連盟の会長になって、震災当時の前会長さん達の心配・ご苦勞がひしひしとわかってまいりました。西宮には、震災以前には小売市場が35団体、商店街が36団体ありました。震災による全壊34%、半壊18%、一部破損31%という状況でした。先ほど、貝原前知事から復旧と復興は違うんだというお話がありましたけれども、現在われわれは「復興できたところ」「復旧まではできたところ」と、「復旧もできなかったところ」に分かれております。その違いはどこにあるのでしょうか。復興できた単組の会長さん、役員さんは例外なく大変なご努力をされています。大型量販店の進出が相次ぐ中で、震災以前から「このままではいけない。なんとかしなくては」という危機感を持って再建・活性化に向けて協議を続けていた単組は、復興が果たせました。一方、これではダメだとわかっていながら、前向きに協議がなされていない単組では復興ができない。特に小売市場の場合、それぞれ個人の事情があり、活性化へ向けての話が一本化できない問題を抱えています。

西宮でいち早く復興できたのが、「ビバ甲子園」。ここは、震災後半年で、ハード面・ソフト面ともに復興し終えた。兵庫県下で第一号になったという事例も、西宮市にはあるわ

けです。本当に心強い、地域の方々のご努力の賜物です。西宮北口の「アクタ西宮」も、復興を果たしました。2つの市場と商店街があり、ここも震災前から話し合いがちゃんとあったからこそ、市・県・商工会議所などいろいろなところから支援をいただいて復興ができたと思っております。「西宮中央商店街」も同様に、行政の支援・指導を受けながら3つに分けた街区のうち、とりあえず1街区が復興できた。アーケードを取り除いて、新しい商店街としてのイメージチェンジを図り、えべっさんの門前通りという地域性も取り入れて、今後どう活性化させていこうかという気持ちで取り組んでおられる。それから、大被害を受けた阪急の高架下や、甲東園の「ニューコート」も、一致団結して復興を果たしておられます。

これからも大型店の出店が計画されている中で、商店街・小売市場をどう活性化していくか、われわれに与えられた大きな課題だろうと思います。行政の力、会議所の力、いま産官学という言葉が出ておりますが、若い学生さんの力もお借りして、本当にわれわれがやる気で西宮の顔としてのまちづくりに取り組み、新しいやり方で復興していくことが使命であると考えております。

柿木 二見さんは、消費者の互助活動や婦人団体の活動を通じて、市民の目でものを見、市民の手でまちづくりを進めてこられた方でございます。

二見 この浜脇地区は西宮にとりまして本当に歴史のある街でございます。中央商店街はえべっさんの門前町であり、宿場町でありました。ところが、バブル崩壊後、賑わいにかげりが見えてきた時期に、阪神・淡路大震災で壊滅状態になりました。

私はそのとき、建石町の婦人会長をしておりましたが、急遽自治会会長代行をさせてい

ただくことになりました。我が家の周りもやはり全壊状態で、南側の西宮西高校（現：西宮香風高校）は避難所になっておりました。2月になると、授業が再開されるということで、教室から体育館に移動いたしました。体育館の板の間では寒さが身にしみます。畳屋さんに古畳の提供を呼びかけましたら、ありがたいことにトラック何台分もいただきまして、皆さん2枚ずつ敷いてまだ余っているほどでした。

その間、浜脇では連合婦人会としてではなく、各町の婦人会長さんを中心に、それぞれの町の事情にあわせて活動をしていただいたように聞いております。

忘れもしません。数日経ちましたときに、近くのマーケットに「何か残ったものはありますか」とおばあさんが買い物に来られました。ところが、売り切れて何も残っていませんでした。お店の方が自分用に持っていたおにぎりを4つほど「よろしければ、これを召し上がってください」と差し出されました。おばあさんはよほどお腹を空かせておられたんでしょう。急いで3つほど食べられたあと、「しまった。おじいさんの分がなくなった」とホロホロと涙を流されました。それを聞いて私は、市役所に参りました。

「自宅の扉が壊れて家を空けるわけにはいかないお年寄りが大勢いらっしゃいます。買い物にも行けず困っておられるので、救援物資を分けていただけませんか」

大口の救援物資は、すべて避難所に配送することになっているとのことでしたが、

「二見さん、ちょうど1000食の救援物資の話が、出雲大社の方から西宮神社を介して来ているんだけど、あなたが責任を持つならこの物資を浜脇地区に回しても結構ですよ」

とおっしゃっていただきました。

私は毎日、高校に集まっておられる各町の自治会長さんのもとに話を持っていき、43号線より南、もちろん香栢園地区の川添町・川東町も含めて浜までの地域の皆さんに、各町の民生委員さんを通じてお分けすることにしました。一人暮らしの方のお宅を訪ねると、手を合わせ涙を流して喜ばれ、そうした経験をされた方の中には、その後もボランティア活動を続けておられる方がいらっしゃる聞いております。

高等学校の避難所がなくなって、西宮浜に仮設住宅ができましたとき、浜脇地区では各町の団体長の皆さんがその運営委員をいたしました。連合婦人会としてはそのとき初めて参画いたしまして、たとえば3月にはイカナゴを炊いて皆さんにお配りするなど、ボランティア活動に入らせていただきました。

だんだんと街が落ち着いて参りまして、8年に入ってから街に賑わいを取り戻そうと懇談会を持つようにしました。当時、白鷹株式会社社長であった故・辰馬寛男さんが第1回目から参加してくださり、ずっとご協力いただきました。ミニ・フォーラムや懇談会を開いたり、おかみさんの会の皆さんとともに励ましあいながら今日を迎えております。

平成13年に阪神西宮駅の高架が完成し、15年の春に向けて大型店「エビスタ西宮」が開店しました。15年の11月にはスーパーマーケット「サカエ」が誕生し、私たちの台所が便利になってまいりました。浜脇連合婦人会は、13年7月に西宮市・阪神電鉄・西宮神社・中央商店街の皆さんとともに、地域住民80名が一堂に会しまして、地区の活性化についての懇談会を持ちました。そのときに、辰馬寛男様から「駅にデパートが来ることは何より良かった。43号線から南が今どんどん賑わいを取り戻しておりますよ。婦人会が何か意義あることをなさるときには、協力い

たします」という力強いお言葉を頂戴いたしました。私達は、ほんとうに商店街の土地を貸してくださるのかなと思いながら交渉をしましたが、幸い 40 坪あまりの土地を無償で貸していただき、そこにオリーブの木が植わっていたものですから「オリーブの会」という名前を付け、県や市のご協力によりフラワーガーデンを作りました。

そして、今年の 2 月、土地をお返ししなくてはなくなりましたので、浜脇小学校の方にガーデンを移し、そちらのほうで小学校の子ども達とともにガーデンの手入れをいたしております。今、子どもの世界が非常に危険であるということで、防犯パトロールをかねて、また、「トライやるウィーク」の時期になりますと、中学生が 10 名ほど来られ、私達といっしょに花を愛し、人とのふれあいを大切にいたしております。

これまでオリーブの会を育ててきましたが、今、ここを中心に大きなうねりがはじまりました。浜脇地区の自治連合会が、まちづくり協議会をつくろうということで、来年へ向けて地区をあげて動こうとしております。これが成功しまして、先ほど田窪さんがおっしゃいましたように、商店街がアーケードを取って明るい街になりました。これからが正念場ではないかと思っております。エビスタに支えられながら、商店街もともに栄えていくようみなさんが一致団結して協力し合う、お互いが支えあうという心になっていただいたら、この町がいい方向に向かっていくんではないかと思えます。

■震災の教訓と、未来への挑戦

柿木 震災は個人の生き方にとっても、まちや国のあり方にとっても多くの教訓を残しました。その教訓をもとにどのような産業づくり、まちづくりを行えばいいのか。どんな考え方やシステムが必要なのか、それぞれのお立場からお話をいただきたいと思います。

山田 二見さんにも、震災直後からすばらしい活動をしていただき、敬意と感謝を申し上げます。まちの課題を自ら解決していこうという意欲と能力を持っておられる方、自律的・主体的に市民として行動していただける方の存在こそ、西宮の大きな財産であり、「豊富な人材のまち西宮」だと私は思っております。

「人を育むまちづくり」の基本は、西宮市を愛していただく人を育てるまちづくりです。これは行政が人づくりに介在をいたしまして、行政に都合のいい人物を育てるという意味ではけっしてございませんで、行政とともにまちを創っていくんだという広い視野を持って活躍していただける人物を育てていきたいというふうに思っております。

そのためには、市民の皆さんが西宮に魅力と愛着を持って、ふるさととして西宮を実感していただくことでございまして、西宮に住んで、働いて、学んで、遊んで、憩って、集う……生き生きと多彩に活躍していただけるステージを築き、どんどん活動の場を広げていきたいと考えています。現在すでにいろいろな部門で多くのボランティアのかたにご活躍をいただいておりますし、元気な高齢者の皆様には経験や技術やノウハウを活かしていただき、有償・無償のボランティアとしてご活躍いただいております。市の仕事をそのような方々にできるだけお渡ししていったら、自ら

仕事に参画していただけるチャンスを積極的に
につくっていききたいと思っています。

今、行政は非常に厳しい状況の中でスリム
化に取り組んでおりますが、多様化する市民
のニーズに的確に応えながら、皆さんと行政
とがそれぞれの特性を活かし、役割を分担す
ることで、真の意味での豊かな住みよいまち
西宮が一步一步実現できるのではないでしょ
うか。

三谷 私どもは、全国各地に事業場を持って
おりますけれども、その地域で愛される企業
であるべきだというのが基本であります。安
全で安心な事業場であるべきと考えておりま
す。

アサヒビールは、全国一律の防災能力アッ
プと、地震の発生確率の高いエリアの対策強
化の2点から取り組んでおります。

全国事業場の一律基準としましては、大震
災発生時の行動基準を、個人と会社にきちっ
と分けて、万が一震災が起きた場合も斉整と
行動できるように基準を作成しております。
また、対策マニュアルづくりにつくりまして
は、当然、各地域の実情が異なりますので、
本店が作成したガイドラインをもとに、事業
場独自の情報を加味した対策マニュアルを作
成いたしております。また、その他飲料・食
料品・医療品・担架などの救急医療品の備蓄

を、各事業場で進めております。

地震の発生確率の高いエリアでは、昨年度、
東海地震エリアの事業場の対策は完了いたし
ました。本年、宮城沖地震エリアの対策を行
い、来年以降、東南海地震・南海地震・東京
の直下型地震の対策を進めていく予定ござ
います。また、東海地震対策地域につきまし
ては、発生後48時間以内に何をすべきか、時
系列に沿ったマニュアルを作り、行動できる
ように決めております。

それ以外にも、事業場の建物・設備の耐震
構造を調査し、耐震工事を完了いたしました。
大地震が起きると連絡網がうまくいかない
というのが大きな教訓でございましたので、
拠点地域には衛星の携帯電話を配布いたしま
した。また、「エマージェンシー・コール」と
いう、社員の安否情報を24時間いつでも登
録し、会社から確認できるシステムを導入し
ております。その他、いざというときの生産
原材料の確保、輸送路のシミュレーション。
地域の皆様への復旧支援策がタイムリーにで
きることをめざして、マニュアル作成が完了
しております。

辰馬 西宮商工会議所の会頭といたしまして、
田窪さん、二見さんにエールを贈りたいと思
います。文教住宅都市・西宮にふさわしい賑
わいとは何かということを考えますと、大型

レジャーや歓乐的・風俗的な賑わ
いではない、住民の生活の最も身
近なところで賑わいを盛り上げる
のは商店街であり、小売市場の活
性化——これは商市連の皆様の
「人間力」ではないかと思ってお
ります。どんどんエリアを広げて
ビッグを目指す店というのも住民
にとっては必要かもしれません。
しかし、商域を狭くして細かく深
く対応していく。店主さんと語れ



るお店にも、住民の皆さんのニーズやウォンツがあると思います。グローバル化というのはけっして均一化ではありませんし、個性を活かしあって全体として輝く方向へもっていくことが大事であります。お互いに排除しあうのではなく棲み分ける関係。西宮市だけで完結させないで、近隣の市とも機能の棲み分けを行っていけば、みんなで支え合う発想というものが出てくるのではないかと考えております。

空き店舗もずいぶんたくさんございますが、それをどう活用するか。先日は関西学院大の学生さんの「たこ焼き選手権」というものがございましてずいぶん賑わいました。あるいは、学生さんがホームページを駆使して商店街の活性化を応援するというアイデアもございます。また子育て支援など、いろいろ市民のウォンツをリサーチするということができると思います。そこで、市民・企業・大学・行政いっしょになって将来像を考え、そういう方向へ巻き込んでいくしくみづくりを会議所は応援していきたいと思っております。

それから市長さんをお願いしたいのですけれど、「文化力」というものも大事だと思います。音楽・芸術・イベントを楽しんだ後の余韻を味わえるムードづくり。たとえば甲子園球場、アミティ・ホール、芸術文化センターへ市外からお客さんが来られて、それを楽しんですぐに駅直行では寂しいわけでありまして、見るべきもの、買いたいもの、おいしいものがあって、お客様にその周辺で余韻を楽しんでいただけるまちづくりも大事ではないかと考える次第であります。

まちづくりには完成というものがない。完成したらそこで止まってしまう。珍しいうちは人もたくさんきて賑わいますがすぐにさびれてしまう。こういうことでは意味がないと思います。どうぞ愛と希望のある西宮、お祭

りももっともっと盛んになるような西宮にしていきたいと、市長さんにお願いする次第です。

田窪 市長さんや会頭さんから心強いお話をいただきました。われわれ商店街・小売市場が地域の顔として、地域の皆さんに「うちの商店街」「うちの市場」と言っていただけるような、強くて優しい商店街になりたい。個店の強化がすなわち商店街の強化だと。市や商工会議所の方からも、いろいろなご提案をいただいています。一致団結してがんばっていきたくて思っております。

二見 今日、えべっさん筋の43号線のところに横断歩道ができて、渡りぞめをしてまいりました。震災後各方面にお願いして、足掛け8年かかってできあがったものです。皆さんのお力添えの賜物と、御礼申し上げます。この地域はマンションがどんどんでき新住民の皆さんも増えてまいりました。今まで住んでいた方々とのコミュニケーションを結ぶ場がございません。それで、先ほど申しましたように浜脇地区のまちづくり協議会をつくり、浜脇まつりを復活させよう、世代間交流を通して子育ても応援しましょうと動き出しております。これが成功しますと、商店街の活性化にも実りのあるものになるのではないかと考えております。

商店街の皆さんには、地域の人々の生活用品は自分達に任してくださいという自負心を持って、気迫をもってご商売をがんばっていただいたらありがたいなと思っております。

柿木 皆様、ありがとうございました。さて、貝原さん、最後にご助言をよろしくお願い申し上げます。

貝原 私は「創造的復興」というお話を申し上げましたが、都市再生の具体例としてイギリスのマンチェスターという産業革命発祥の地があります。煙突からモクモクと排煙が立

ち上る古くからの産業都市が、低コスト競争の中で衰微していったわけです。それが見事回復復興を遂げたのは、マンチェスター交響楽団をつくり、サドル氏という世界的に有名な若手のコンダクターを招聘して、音楽で非常に有名になったのがきっかけです。都市のイメージが、産業都市から文化都市へと一変し、マンチェスターは大変活性化したと言われています。こういう例はアメリカでもあり、かつて全米一環境の悪い都市と言われたチャタヌーガ市が、環境を再生することによって人口が増え、活力を取り戻したそうです。

そういう例を考えますと、私は、西宮市はたいへん恵まれた都市ではないかと思います。現に人口も震災前よりはるかに増えています。さらに、若干手前味噌になりますが、県の芸文センターという新しい芸術の殿堂が生まれ、マンチェスターのサドル氏同様に、佐渡裕さんという世界的に有名な若手の指揮者が一生懸命まちおこしをやっていこうという情熱を燃やしています。芸文センターを、わがまち西宮という市民の誇りとして皆様方でお作りいただくことが、一つの西宮市の大きな魅力となり、賑わいをもたらし、市民の皆さんの生活の豊かさにつながっていくのではないかと思います。

西宮にはほかにも魅力がいっぱいあります。辰馬会頭がおっしゃいました原風景としての酒蔵、世界的にも有名な灘の酒も魅力の一つでありますし、健康志向・本物志向の中で、食品産業は大きな発展をみせています。西宮には有名なお菓子屋さんやレストランなど、食のグルメのまちとして宣伝すべきところが数多くありますし、甲子園球場という日本の近代スポーツのメッカもあります。西宮のヨットハーバーは東洋一ですし、二見会長がおっしゃいました西宮えびす神社もあります。さらには、すばらしい大学がいくつも立地し

ており、今までは象牙の塔の中に閉じ込められていた大学の知的集積が、今後の成熟した付加価値社会で地域の力と結びついて、非常に大きな価値を創造していくのではないかと言われております。

神戸に住んでいる者としてはうらやましいぐらいであります。こうした資源を活かして、付加価値をさらに高めていくことによって、西宮市は市民が豊かな生活が営める都市として、国内のみならず国際的にも高い評価を得ていくのではないのでしょうか。その原点は山田市長がおっしゃったような、まさに西宮市の「人づくり」なのかもしれません。皆様方の今日のご発言を聞きまして、ご努力の成果を期待しながら私の話を終わらせていただきます。

柿木 ありがとうございます。大変元気の出る話をいただきました。

西宮にも縁のあります作家・遠藤周作が、このように書いております。「愛というのは忘れないことだ」と。実は、私は教え子を二人、そばに連れてきております。震災のときに亡くなった教え子であります。大学に遺ってありました卒業アルバムから写真を複製して、それ以来一日も欠かさず、夏も冬も持ち歩いております。今日はこの子達も二人、皆様のお話を伺い、たくさんの方に見ただいて、忘れてはいない、覚えてくださっているということを感じていると思います。パネリストの皆さん、本日はありがとうございました。会場の皆様、受講してくれたこの二人の学生にも拍手をお贈りください。ありがとうございます。

4 座談会 未来に向かって 復旧から復興へ。 そして、西宮の未来へ向けて。

出席者：

武庫川女子大学名誉教授（コーディネーター）

柿木健一郎氏

震災復興記念事業実行委員会

委員長 稲鍵 雄康氏

西宮商工会議所 会 頭 辰馬 章夫氏

西宮市商店市場連盟

会 長 田窪 敏二氏

有限会社ツマガリ

代表取締役 津曲 孝氏

古野電気株式会社

専務取締役 古野 幸男氏

西宮浜産業団地企業連絡協議会

事務局長 藤本 敏夫氏

（順不同）

柿木 本日は、西宮の経済界を代表する皆様方にお集まりいただき、まことにありがとうございます。あの激震の日から10年が経ちました。震災時から今日まで、企業の責任者として、また地域や家庭において、それぞれたいへんご苦勞をされたのではないかと思います。事業再建と復興への歩みを振り返りながら、西宮の将来のまちづくりや、それを担う「人づくり」についても、お話を伺っていきます。

まず、震災の朝を皆様はどのように迎えられたか、というところからお伺いしていきます。



■震度7・激震の瞬間

稲鍵 私は芦屋のマンションにおりまして、激しい揺れでベッドから振り落とされました。その瞬間、「ここがこれだけ揺れたのだから震源地はさぞやたいへんだろう」と思いました。まさか、自分の住んでいるところが震源地だとは思ってもよらなかったのです。父親は実家で一人で暮らしておりましたし、母親が西宮県立病院に入院していて、その日がちょうど退院予定の日でした。長男としてどのように家族全員に連絡し、身の安全を図るかということが最初に頭をよぎりました。

辰馬 震災発生が早朝5時46分、まだあたりは暗く、もうそろそろ起きようという時に突然突き上げるような衝撃がありました。最初は地震と思わず、階下の台所でガス爆発があったと思いましたが、しばらくたつと横揺れが起こって、初めてこれは地震だと気づきました。家具が倒れかかってきたんですが、たまたま隙間で助かりました。家の中が食器やガラスの破片だらけになっている上、眼鏡がどこかに飛んでしまって何も見えず、歩くのもたいへんでした。

家から外に出ると風景がまったく変わっておいりました。幸いにも我が家は倒壊を免れましたが、周りは昔からの瓦屋根の家が多かったので、ほとんど倒壊して、マンションだけが姿をとどめている状態でした。子供たちに近所の方を助けに行くよう指示し、私は、もしも弊社関連の甲子園都ホテル（現・ノボテル甲子園）が倒壊していたらたいへんなことだと思い、着の身着のまま車で飛び出しました。ホテルの無事を確認したあと、会社に行こうとしたのですが、道がまったくズタズタになっていてなかなか進めません。道々、大関さん、日本盛さん、ほとんどの古い酒蔵が



「灘はもう1年は立ち直れないだろう」と言われましたが、メーカー同士の助け合いで1ヶ月足らずで生産再開にこぎ着けることができました。【辰馬】

倒壊していて、ほんとにこれには涙が出ました。「これは、うちもあかん」と覚悟しました。1時間以上かかって会社にとどり着いたとき、目に飛び込んできたのは全壊した木造蔵の無残な姿でした。ところが、驚いたことに、大正6年に建てた旧本社が無傷で無事だったのです。木造の瓦屋根で釘を一本も使っていない建物が、見事に残っていました。これは奇跡的なことでした。しかし、寒造りの最中で、蔵人の方が10人近く亡くなられたことが悔やまれてなりません。

田窪 私は朝、仕入れに出かける前で、まだ床の中にいました。自宅前に広い駐車場があるのですが、そこに飛行機が突っ込んだんではないかと思いました。それと同時に枕元の本棚がバサッと自分の上にかぶさってきて、次に横揺れが起こって地震と気づきました。

当時 78 歳の母親に声をかけても、返事がないんです。もしやと思い血相を変えて様子を見に行くと、足にたんすが倒れかかっていたんですが、命には別状はありませんでした。ただ、びっくりして声が出なかったんですね。家内は起きて店の帳面を付けておりましたが、無事でした。私も着の身着のまま外へ飛び出して、車のラジオをつけて。表に出てきた近所の人たちといっしょに、まだ出てこない近隣の戸をたたいて「生きてるか〜！」と、声をかけあいました。皆さんの間に、互いを思いやり助け合う気持ちがあふれていました。その日は、親類や知人の安否確認にすべてを費やしました。

津曲 私は創業して間もない頃で、夜の 3 時頃まで仕事をしていました。寝入りばなに地鳴りがして、吹き飛ぶような激しい揺れに襲われました。社員達の安否が気がかりであちこちに電話しましたが、通じません。甲山に上ると、眼下の街に煙があがっています。車で街へ降りようとしたら道路が盛り上がり、動けません。たいへんなことが起きたのだとわかりました。自転車で降りて行くと、上大市あたりで家が燃えている。「どうして消防車が来ないのだろうか？」と思いながら進むと、どんどん恐ろしい風景になっている。見ると社員の家がないんですよ。「まさか、死んだのか？」と思ったら、お子さんがひょこっと出てきて。幸いご家族全員とも無事でした。「生きてて良かった！」と、手を取り合って喜びました。

その後、木に埋もれているおばあちゃんを助けました。道具もない中、半日がかりで助け出したその瞬間、涙が出てきて身体が震えました。

とにかく住む場所が必要ということで、その日のうちに社員の家族全員の住まいを 5、6 軒手配しました。地震というものはとてつ

もなく恐ろしいものなのだなということを痛切に感じて、怖さと責任感でいっぱいになりながら無我夢中で動き回った一日でした。

古野 私は 2 階で一人寝ていて、家内と子供が別の部屋に寝ていたんですけれども、足下の本棚が倒れて硝子が割れて散らばっているのがわかりました。妻子の様子を見に行くと大丈夫で、ほっとしました。ラジオをかけても地震の放送はなく、1 階に行ってパンか何かを食べて 8 時ごろ会社へ向かったんです。会社まで自転車で 15 分ぐらいの距離なんです。下り始めたところで何軒かがつぶれていました。農家の立派な蔵がつぶれて、電柱が何本も倒れていて、これはたいへんなことだなと。会社につくと、ビルのガラスが全部割れていて、中に入ると大きな柱にも亀裂が入っていました。屋上にあるタンクから暖房



「今振り返ると、震災の逆境が当社の飛躍のばねとなり、ネット通販という新しいビジネススタイルを教えてくれたように思います」【津曲】

用の重油が漏れ出して、階段を伝って下まで流れ、匂いを放っていました。社員が70～80人出社していましたが、建物に入れないので玄関前のところでどうするかを話し合っていました。まずは社員の安否の確認が第一だと。それから、雨をしのぐために、割れた窓にとりあえずベニヤを貼るよう工務店に手配して。ところが、大阪のほうに電話すると、「何もないよ」といって平穩なんですね。大阪と西宮との被害の差、受け止め方の違いを実感しました。

藤本 私は阪神深江駅前の自宅マンションの8階にいました。ちょうど妻が立ち上がって電気のスイッチの紐を引っ張ってから、5～6秒後に突然大きな揺れがきて、すぐに電気が消えました。また作り付けの家具だったの



「自分たちの手でできることは自分たちでやっいてこうと、産業団地の企業が一体となって復興に取り組んでいます」【藤本】

でモノが飛んでこないですみましたが、マンションが倒れるかと思うほどの揺れでした。ベランダの南側をみると何か景色が違う。そう、高速道路が倒れていたんです。ガラスが木っ端みじんで部屋の中を歩けません。玄関のドアも開かず、体当たりして扉を開けました。会社のある西宮浜の産業団地の状況が気になり、自転車であっちの道、こっちの道、通れる道を探しながら向かいました。埋立地は液状化現象で地面がドロドロ、長靴を履いてもめり込むような状況でした。

柿木 私も寝ていた布団の上に仏壇が倒れてきて、灰がたちこめて息が苦しくなり地震に気がつきました。親不孝をした仏罰が当たったなと思いました。そして、結婚前の娘は大丈夫だろうかと。私の場合すっかりうろたえてしまい、破片が散らばっているのにスリッパを履くという気持ちも起こりませんで、しかも、暗いもんですからライターを付けて明かりにしたんです。当時は恥ずかしながら防災の初歩の初歩も知らないほど、安全安心神話の中に浸りきっていたというのが本当のところですよ。

■最初の1週間の苦闘・奮闘

柿木 その後一週間、どなたも八面六臂の大活躍をされたことと思います。寝る時間を惜しんで、疲れていても疲れたと言えないほど走り回る1週間だったと思いますが、いかがだったでしょうか？

稲鍵 おかげさまで、家族・親戚・社員とも全員無事だったのは幸運だったなと感謝しております。私どものガソリンスタンドは、地下タンク・防火塀も無事で、電気も通じていましたので、すぐに営業を再開することができました。当時、私は兵庫県石油商業組合の

理事長をしていましたが、神戸の組合事務所の電話が通じないので、東京にある全国石油商業組合連合会に対策本部を作ってください、そこに電話して私からの指示を出しました。その内容は「在庫が切れるまで店を開けておくこと」「できるだけ電気を煌々と灯して、多くの皆さんに安心感を得ていただくこと」「サービスステーションが、災害復旧の拠点の一つになるようみんなでがんばろう」ということでした。また、公用車でない個人の車の給油は10リットルまでに制限し、言わずもがなですが便乗値上げは禁止という指示をいたしました。結果的には灯油も含めて効果的に流通させることができ、後日、資源エネルギー庁長官から関西電力と兵庫県石油商業組合に感謝状をいただけるほど、皆さんよくがんばっていただいたと思っています。

辰馬 一週間は、自らの生活の確保と安否の確認にほとんどを費やしたように思います。ひとつの教訓として、平素、近所にどういう人がいて、どういう生活をしているのかを知ることが、助け合いの心を生むということを実感しました。私の家は塀が倒れましたが何とか空間が確保できましたので、何家族かうちへ来ていただいて共同生活を送りました。新潟と違って大きな余震がなかったことと、電気が早くきたことが幸いだったと思います。

私どもは酒屋でございますので、あちこちの病院から「水がほしい」と緊急の依頼がありました。ほんとにそういうご要望にお応えしたかったのですが、道が通れない、トラックがないということでお応えできず非常に歯がゆい思いをしました。水に関しては、アサヒビールさんが、病院へトラックで運んで貢献しておられたようです。酒屋の方は、そこまで力がなく申し訳なくっております。その代わりというわけではありませんが、私どもで経営する学校と幼稚園の体育館や遊戯室

を、避難場所として地域に開放させていただきまして、そのへんはお互いの助け合いができたのではないかと考えております。

そういえば、商工会議所も1週間後にもう総合相談所を開設しているわけですね。ほんとうにすばやい行動であったと思います。別館は全壊しておりましたが、無事だった議員クラブとロビーを使って、金融機関の方や、県や市、通産局、商工行政の方、弁護士さん……各界の方が集まってまことに頭の下がる対応をしていただきました。当時私は会議所にはあまり関わっていませんでしたけれども、長部会頭、白井専務のもとですばやい行動をとられたことには驚きました。それから、情報の確保、これがいちばん大事だなということを感じました。マスコミ情報というのは得てして、十のことが一になり、一のことが十になり、なかなか本当のことが伝わらない。やはり独自のネットワークを築いておくことが必要だなと思った次第です。

田窪 私は、ご近所の方の安否確認が終わったあと、近くにある店舗を確認に行きました。コープこうべさんとの共同店舗で建物自体には大きな被害はなかったのですが、店の商品は全部棚から落ちていました。その日の晩に市役所から「建物は大丈夫なので、店を翌日から開けてください」という連絡を受けました。そこで、晩のうちに大急ぎで片づけて、翌日から在庫の品物で店を開けました。お客さんには、「何か役に立つものがあれば、どんどん持っていってください」と。コープさんもガスボンベなどを他の地域から集めるなど、品物の供給をかなりやられていました。コープさんも私どもも、商売ぬき・採算度外視で営業をし続けたのです。

しばらくの間、西宮へほとんど物資が入ってこない状態が続きました。西方面からは道路が通れないので、フェリーで大阪港に下ろ

して、東から回ってくるのです。非常にありがたいなあと思ったのは、広島県の豊町大長の産地の方が、他へ出荷予定のみかんを避難所へ渡してあげられるかと、卸売市場の方へ問い合わせたことでした。水の代わりだったので、いただいたみかんを水の代わりにしてくださいと、皆で手分けして配りました。うちは、上ヶ原南小学校と、甲陽園小学校に、30箱ぐらいずつ持っていきました。津曲 震災2日目に50人の社員全員を集めました。冷凍庫にあった食料を分けて、トラックに乗せて西宮の駅まで送り「また商売ができるようになれば呼ぶから」と、5、6人を除いてあとは家に返しました。工場にある牛乳やいちごなどの生鮮食料品は近所に配



「何かの役に立つものがあればどんどん持って行ってください」と、震災翌日から商売抜きで営業をしつづけました。【田窪】

り、焼き菓子トラックに積んで避難所に持っていきました。その時は水は来ていたのですが、食料はまだ調達されてなかったと思います。安井町から神呪寺の小学校まで、何箇所かトラックで回りました。

今振り返ると、あの1週間は、昼間は一生懸命動いて忘れているが、夜になって一人になるとひたひたと不安が押し寄せてきました。この商売はこれから先やっていけるだろうか、このまま売上をあげられずに意気消沈して、借金背負ってがんばっていけるだろうか。まさか、その3ヵ月後に会社が一大飛躍することになるとは思わなかったんです。

家内が感心してくれたのは、それまでのらくらくしていた男が、地震にあったとたん目が覚めたように精力的に動き回っている姿です。初めて「おとうさん、頼もしく思います」と言ってくれました(笑)。

柿木 俗に「火事場の馬鹿力」と言いますが、非常時には自分でも思ってもみない大きな力が出るものですね。

古野 自宅は水道とガスがダメで、水を確保するために隣の広田小学校で列に並んだこともありました。風呂がなくて、家内と子供が大阪市内のビジネスホテルに行ったりしていました。会社の方は、まずは安否の確認から行いました。また2月の決算が迫っていてすぐに仕事ができる態勢を作るのに苦労しました。

藤本 自宅のある9階建てマンションの3階から4階にかけてくの字形につぶれて、エレベーターが動かなくなっていました。階段も中央階段が途中で通れなくなり、左右の非常階段しか使えません。水をポリバケツに入れて8階まで持ってあがるのがたいへんでした。飲み水はともかく、トイレの水が大量にいらしますので。この一月、ふた月の間に、足腰が丈夫になりました。

職場の方は、産業団地が埋立地のため液状化現象が起こり、建物や生産設備が倒壊していました。道路や防波堤・護岸が陥没し、亀裂が走っていましたし、埋立地のガスや水道のライフラインが復旧するのは、市内が復旧した後、一番最後にあんという状況でした。西宮大橋が損壊し、湾岸線の甲子園浜と西宮浜の間にある西宮港大橋も橋桁が落下し、側道も段差になっていました。西宮浜産業団地は完全に陸の孤島となりました。

私はすぐに「大橋を早く直してほしい」と県の方へ陳情に行きました。次に、完全に陸の孤島になり従業員の通勤の足がありませんので、県の尼崎港管理事務所へお願いして、今津港から西宮港まで渡船を出していただけることになりました。もう一つは水道の確保で、水道局にお願いして、大橋の復旧を待たずに川鉄のところから地下の水道管を通していただきました。さらに、香榎園浜から西宮浜へ抜ける仮設道路を作してほしいということで、ほとんど家に戻らずに走り回っていたような感じでございます。

柿木 震災後一週間ほど、近くの小学校の体育館で避難所生活をしましたが、ずっと大学へ行き約一ヶ月間は、学生の安否の確認に当たりました。学内に増設された公衆電話に同僚の教授たちが朝から夕方までしがみつки、確認の電話をしていったのです。ふだん以上に教師の心が教え子たちに向かっていました。それから、学生たちに呼びかけてボランティアを組織化し、4月の新学期が始まるまで、学生たちは大挙して市内各地でボランティア活動に参加しました。この活動は大学のどんな講義よりも、学生たちの人間形成に役立ち、社会を見る目を豊かにしてくれたと思っています。



「西宮の“光”とは何か。助け合いの中から安全で安心で安徳な街をつくることによって、安住できる街ができるのだと思います」【柿木】

■復旧から復興への確かな歩み

柿木 さて、震災後の復旧から、その後10年間の復興へのご努力についてお話を伺いたく存じます。会社のこと、地域のこと、業界全体のこと。不景気も重なりまして、たいへんだったのではないのでしょうか。

稲鍵 一ヶ月たち、私の周辺も次第に落ちついてきました。全壊した商工会議所の別館の建て直しをどうするかということが問題になり、「当面はプレハブでいいのでは」「いや、本格的にいいものを建てよう」と議論を尽くした末、現在の別館が建ちました。長部会頭のすばやい決断が良かったのではないかと思います。

ております。

この阪神淡路大震災で、ガソリンスタンドは強い、火事のもとにはならないということが実証されました。消防庁の規制緩和が進んだ結果、建設費も半分かくらいですむようになり、業界に大きな変化をもたらしたのです。マイナス面では、建設費が安いということで新しいSSができて競争が激化し、古いタイプのSSが撤退を余儀なくされていったこと。プラス面としては、石油製品の販売にとどまらず幅広い商品を扱うようになり、大きく他の業種への転換をはじめてきたことではないかと思います。

辰馬 灘は全国3割のシェアを持っていますので、出荷がストップすると、お得意先の商売にまでだんだん影響が及んで、「いつ生産を再開するのか」という問い合わせを多くいただくようになりました。新しい鉄筋の酒蔵のあるところはそこを主力工場として早く復旧できたのですが、木造蔵だけに依存しているところは全くめどがたたないという、企業間の格差が出てまいりました。ちょうど私は灘五郷の理事長をしておりましたので、各蔵元の被害状況をまとめて国に特別支援措置を陳情する日々が続きました。西宮市にはインフラの整備を早くしてほしいとお願いし、金融的な措置は国の方へ陳情に行きました。

皆さん努力をされまして、早いところでは2月に瓶詰め工場が動き出したメーカーもありました。また、伏見の酒蔵まで酒を持って行って、そこで瓶詰めしてもらったメーカーもあります。酒屋どうしが助け合いながら、生産をカバーしあってお得意先の要望を満たしました。中には「灘はもう1年あかんで」とおっしゃる方もいましたが、1ヶ月足らずの生産再開で「えらい早いこと荷物送ってくれたな」とお得意先に声をかけていただき、たいへんうれしく思いました。

生産の復旧の次は、街づくりです。生産設備は建て直しても、古い酒蔵が軒を連ねている酒の街らしい伝統的な風景がほとんど消滅してしまったのは、大きな財産を失ったなど。当時はそこまで気が回らなかったのですが、今から思えば悔やまれます。元に戻すのは無理としても、できるだけ原型に近い形で酒蔵風景を基本にした酒蔵通り等の風景づくりに力を注ぎたいと思っております。宮水を守っていただいているご恩返しとして、地元の発展に貢献することも、地元企業である私どもの大きな使命だと考えております。現在、酒蔵通り一帯の風景を作り出したのはそういう気持ちからでございまして、西宮商工会議所が唱える「Lライン構想」に基づく元気スポットになりつつあると思っております。

田窪 先ほど柿木先生からお話がありましたが、震災以降、多くの若いボランティアの方々のお世話になり、それまで意識になかった「ボランティア」というものがはっきりと体にしみついてわかりました。自分もこの年ですが何かできることがあればやろうという気持ちになりました。一ヶ月ぐらいの時、市も商工会議所も我々商店街に顔を出していただきました。うれしかったですね。自分たちだけで復興していくのではない。皆さんが相談に乗ってくれるんだと。当時、私は小売市場の副会長をしていたのですが、そのときの連盟の会長が津田さん。小売市場の会長の中村さんと各地の市場を見て回りました。どこも大きな被害を受けていましたが、中には復旧できそうなところもある。そこで、1千万円の緊急融資を6、7単組で使っていただきました。そのあとすぐに、仮設店舗の建設では市にもお世話になりました。しかし、以前から後継者不足や、若い人との考え方の違いがあって、10年経ってもいまだにそれが完成されていない場所もあるのが現状です。

震災一年後くらいは大型店の進出ラッシュがあり、それが商店街、小売市場の建て直しの決断を鈍らせたひとつの原因にもなるかと思います。現在も、商店街、小売市場とも今後どうすべきなのか考えながらがんばっている状況が続いています。

津曲 私のところでは、一週間経ってから社員5人で店を開けることにしました。神戸大丸店は当分オープンメドが立たないということで、梅田店と心斎橋店に出店をお願いに行き、話がまとまりました。一週間以内になんとしてでも生産体制を整えなければならない。都市ガスが来ていけませんので、100kgのLPガスボンベを10本岡山から取り寄せて、オープンが動くようにしました。

ところが、店を開けてみたものの全くお客さんが来ないんですよ。店長が、「社長、お客さんを呼び込みにいってください。お願いします」と言うんです。西宮の駅前でトラックに幟を立てて、壁に宣伝文句を書いて、拡声器をつけて、自分でしゃべろうとするが言葉がなかなか出ない。マイクを持つ手を震わせながら「お見舞い申し上げます。ツマガリは開店しております。おいしい焼きたてのショートケーキとシュークリームを用意していますので、ぜひお越しください」と、やっとの思いで一生懸命話しました。そうやってしゃべりながら回っていると、一日5万円ずつ売上がアップしていったんです。

そうして一ヶ月間、池田から神戸までくまなく回っていると、各地区の被害状況が手に取るように細かくわかるようになってきました。夕暮れの五時くらいになると山手あたりはシーンと静かになるんです。すると私は店の宣伝はやめて「空気が乾燥しております。火の元には十分気をつけてください」「泥棒が増えているので戸締まりをしましょう」とふれて回りました。すると、お年寄りが手をた

たいて喜ばれるんです。やっぱり寂しかったんでしょうね。元気な声を出して回っても、誰もうるさいと言わないんですよ。

1週間後には、「忙しくてたまらんからすぐに戻って来い」と社員を呼び戻しました。トラックでの宣伝を1ヶ月間やった結果、その店が250万円売れるようになりました。2月に入ると工場を拡張して、3月には7000万円の売上げになり、夜通しかかっても間に合わない。震災から全員無事に生き残れたことを感謝して、そのお返しだと思ってしゃにむに働きました。

強い意志力と前向きな姿勢があれば、新しいアイデアがどんどん浮かぶんです。「店は小さく、ブランドは大きく全国へ」ということでネット通販をはじめたら、今やこのネット事業が全体の30～40%を占めるまでに成長しました。商売を進化させるやり方を、地震が教えてくれたんじゃないかなと思います。これからも、このビジネススタイルをますます進化させていきたいと考えています。

古野 実際、本格的に日本の経済・社会が大きく変わり始めたのが、震災の後ぐらいからだと思います。金融機関がつぶれたり、名前が変わったり、統合したり。私どもの国内の取引が7割・海外の取引が3割だったのが、この10年で国内45%、海外55%と逆転しています。お客様も漁業関係が中心だったのが、今は海運会社や海外の個人でレジャーを楽しまれる方が多くなっています。そうした大変化の中でどうやって生きていくかが、現在の大きな課題だと思っています。

藤本 各種インフラの復旧については国・県・市や関係機関にやっていただかなくてはならないことですが、それとは別に産業団地の民間の手でできることは、自分たちでやっていこうということで、地震後「阪神・淡路大震災復興対策委員会」を立ち上げて、

産業団地の企業さん一体となって復興に取り組みました。

県の渡船とは別に、西地区の企業さんの手で香柵園浜から西宮浜まで渡船を出しました。運休していたバスについては、阪神バスに再三働きかけまして、阪神西宮から国道2号線を北今津まで進み、そこから甲子園まで出て湾岸側道を西宮浜まで通るルートを作りまして、当初は朝4便・夕方4便の運行から、1ヵ月後には終日22便の増便になりました。

団地内の鉄工所において大きな水のタンクを作ってもらい、北地区と南地区に設置して飲料水を確保しました。また、井戸を掘って生活用水を確保するということもいたしました。

唯一の連絡の道だった湾岸側道が、家屋の廃材を運ぶトラックで大渋滞になりまして、市街地から浜まで2～3時間かかるんですね。従業員の皆さんが、通勤ができないということで辞めていきますし、お得意様も来ていただきにくいということで、甲子園警察にお願いに行ったんですが、とてもそんな人員は回せないということで、運送会社において社員の方に交通整理をしていただいたこともございます。

当時、国道2号線・43号線が、通行許可証がないと通れない時期がありました。ところが、湾岸側道までそういう規制がかかりましたんで、警察に参りまして交渉を重ねた結果、規制の前日ギリギリに団地企業7000台分の運行通行の許可証をもらうことができ、社員の皆さん約100人に警察に出向いていただいて、会議室で7000枚の書類を手分けして書いたことを覚えております。

西宮大橋の早期復旧が困難な場合は、どうか仮設道路を作ってほしいということで、周辺自治会とともに窮状を訴えました。ところができた仮設道路は車は通れない、人間と自



「実際にこの10年で当社の取引の国内～海外比率は逆転。震災後から日本の経済・社会も大きく変化はじめたと思います」
【古野】

転車しか通れないということになりましたので、急遽芦屋浜の芦屋浜風大橋に車を通してほしいということで、阪神臨海対策事務所と芦屋の自治会において、神戸方面からのアクセスを確保した経緯がございます。

地震の後、埋立地の南西部に復興住宅が建つことになりました。企業さんの中には、24時間フル操業をするために住宅地を離れて埋立地へ移転してきたのに、また周りに住宅地ができて追い出されるのか、ということで反対もあったのですが、地震という事情ですのでお互い共存共栄でいきましょうと。企業側も騒音・振動について十分注意する。しかし、24時間企業活動をする車も走りますよ、それは理解していただきたいということで協定

を結びました。以後、「マリンフェスタ」という秋のイベントを住民の皆さんと主催するなど交流を深めています。

■そして、西宮の未来へ向けて

柿木 皆さんの震災から今日までのいろいろなご苦労・ご努力を伺っているうちに、私は59年前の太平洋戦争が終わったときの情景を思い出しました。私は戦争が終わったとき中学3年でしたが、空襲で日本中が焦土と化していました。その廃墟の中から、どうして立ち上がって復興することができたのか。当時の大蔵大臣が、1千万人の国民が餓死することを本気で心配した時代ですから、足らざるを補いあい、助け合うというところから戦後が始まったような気がします。善意と民主主義が戦後の復興の大きな力になったと思いますが、残念なことに善意で世の中を作り上げていくという動きは、あっという間に消えてしまったような気がします。昨今の新興企業人には、「世の中は“勝ち組”と“負け組”に分かれる」「人の心はお金で買える」と何のためらいもなく言う人がいますが、私はこういう世の中のことを「猿の惑星」ならぬ「ゼニの惑星」と呼んでいるんです。震災の後、補い合い助け合うというシステムが、根本においていちばん大事なんだと。これは文化の問題であろうと思うんですが、そういうシステムを再確認しなくてはいけないという動きが出てまいりました。これは半世紀の間に2度の日本人の痛切な経験でありまして、これが今後の社会づくり、国づくりに生かされなくてはならない。そういう気がいたします。

そこで、ご意見をお伺いしたいのですが、まちづくりの中身は、家庭づくり、会社づくり、地域づくりであると思います。どんな街

がいい街なんだろうかと、キーワードのようなものをご提言いただければと思います。

稲鍵 私は、辰馬会頭を支える副会頭でございますので、辰馬会頭の言われる酒蔵、夙川の赤レンガの風景を中心に、西宮らしさがありこちで見受けられる街を作りたいと思っております。作りたいといっても、商工会議所の力は限られたものですけれども。先日 of 新聞報道で、西宮の人口は尼崎を追い越す——これは震災前は誰も予想しなかったことです——と。マンションブームでどんどん人が入ってきている。人が入ってこないと言に賑わいが起こらないですね。その反作用として、緑であるとか、アメニティが犠牲になっていくこともありますので、それを私たちが行政とともにバランスを取りながら、公園づくりであるとか、市長が言われているサッカー場、音楽がいつも聴ける街角など、商工会議所がうまく横糸をつないでいながら西宮らしさを演出したいと思っております。自然と文化に恵まれ、県の芸術文化センターもできますし、ららぽーとや阪急百貨店などの大規模商業施設、商店街、いろいろできると思いますので、新しい時代に入ってきたんだということをみんなが意識しながら、さまざまな問題を解決して行って、いい西宮のまちを作っていきたいなと思います。

辰馬 量の文明が飽和点に来ておりまして、これからは質の文明。それぞれが生活の質をどう高めていくかという時代に入っております。私はこれからの都市の魅力というのは、まず「安全である」「防災意識が高い」というのが最大の魅力だと思います。それから、稲鍵さんが先ほどおっしゃられたことを一言で言うならば「文化力」だと思います。文化力が地域力に相乗していくという形が生まれれば、たいへん魅力的な街になろうと思います。

それから、ぜひ田窪さんを応援したいと思

うのですが、大型店がどんどん外から入ってくる、街の商店が全部コンビニになってしまう。これも消費者には必要ですが、そればかりでもハッピーではない。いわゆる「ご近所ビジネス」、Face to Face、Heart to Heartでつながっている、通行人だって顔がわかっている、そういうお店が近所にある、そういうふうなこともより必要ではないかと思うわけです。文教住宅都市にふさわしい街のにぎわいというものを、商店・市場が大きなウェイトで担っていただきたいなと心から思っています。

防災安全という観点からいえば、それぞれの会社の職場が高い倫理観を持って安全・環境に配慮する。そういうところからは必ず人に感動を与えるいい商品が生まれます。そういうところが盛り上がっていくと、ツマガリ



夜中もサービスステーションの電気を煌々とともして、多くの皆さんに安心感を得ていただけるよう指示を出しました。

【稲鍵】

さんのところが元気なように、「ひとつイベントをやるうじゃないか」という力になっていくんじゃないか。そこでいっそう街が盛り上がっていった結果が固まる、そういう循環がいいなあと。

先ほど柿木先生が、人づくりの大切さをおっしゃっておられましたけれども、まさにそのとおりで、街をつくるのは市民であり、企業市民である。その基本は人であり、つまりは教育である。知育・体育・徳育とよく言われますけれども、ここに「食」を加えて、「食を通じた知育」「食を通じた体育」「食を通じた徳育」をぜひ入れていただきたい。これは料理研究家の服部幸應^{ゆきお}先生がいつもおっしゃっていることなのですが、満ち足りた食事をしているのは、地球の人口60億人のうちのわずか5億人だけだそうできて、日本の1億2000万人は全部その5億の中に含まれるそうです。それなのに精神的な豊かさが感じられないという矛盾があります。酒造りを通じて、食卓を囲む家族の団らん、おいしさを通じた人づくりが私たちの使命と考えています。

田窪 辰馬会頭さんからエールをいただいたところですが、今まで文教住宅都市といわれ商業面では大阪・神戸に遅れをとっていた西宮に、ららぽーとや阪急百貨店といった大きな商業施設ができるということは、我々の競争相手ではありますが、復旧から復興へ進んでいるという西宮全体にとってのイメージアップができると思います。かといって、既存の商店街がだめになっては困る。地域で買い物をして、商店街に集まったお客さん同士の会話から地域の良さが生まれてくる。市場連盟としても地域に密着して、回遊できる商店街づくりを進めています。商店街の基本は、魅力のある「強い個店」からだ。いま、市や商工会議所の協力を得て、りそな総合研究

所の先生にコンサルティングをしていただいて、どのように地域に根ざした商店街にしていこうかと。今年だけのイベントではなく、2年3年先を見据えて、長くそれを続けることによって地域の人が集まってもらえる商店街づくりをやっていこうと。やる気のある人が集まり、5年10年先の計画づくりを来年3月までにしようという力を入れてやっています。震災を経験したことによって、地域の中に相手を思いやる気持ちが生まれてきています。人とうち解けて、何でも話せるような関係が、よりよい地域社会に欠かせないのではないかと思います。

津曲 私はあくまでも商店街にこだわります。いろいろな大規模商業施設から出店要請がありましたが、基本的に出しません。徹底的に商店街にこだわるのがぼくの生き方ですから。百貨店も閉めていきたいぐらいですね。

「西宮インキュベーション」という計画がありまして、清酒メーカーさんは活発に展開されています。ほかの業種も同じようにできないだろうかということで。お酒というのは西宮のイメージとして存在感があるんですが、洋菓子の存在感が薄い。実は、西宮市に100軒もの洋菓子屋があるんです。なのに、芦屋のお菓子の方が有名。そこで、お酒屋さんに負けないほど、西宮の洋菓子屋の存在感を全国に示そうということで、2000年から毎年「西宮洋菓子園遊会」を開いています。今やどんどん申込者が増えてきて、お互い切磋琢磨しあって活気づいてきました。商店街でも同じなんです。傷のなめあいをするとうんどん下がってくるけれども、あいつががんばってるんだったら俺も！と、お互いに戦っていけば、未来展望は明るくなるはずですよ。

次に、企業の人づくりということでは、「事業ができる人材」を教育するのが私の目標です。独立できる人間を育てれば、自然と企業

は強くなる。現在12人卒業していったんですが、1人としておちこぼれなしで全員成功しているのですけれども、最初に成功する人間を育てることを目標にしているからです。スーパーマーケットの人材育成はサラリーマンの育て方ですけども、われわれ商店街の人間は独立する人間を育てるのが本分だと思います。

古野 津曲さんの迫力には、いつも圧倒されます(笑)。「西宮を核にして世界に羽ばたく」というのが当社の考えです。先ほど申し上げたように、10年ほど前は3割から3割5分ぐらいが海外での事業展開、現在は5割以上になっていて、今後、ますます海外での展開が拡大していくものと思われます。西宮で商品の企画・開発を行い、生産は三木と西宮浜で行う体制なのですが、この本社の頭脳部分をさらにレベルアップして世界のお客様に喜んで商品を提供させていただく。その収益を税を通じて還元していくことが、西宮に貢献できる役割だと思っております。

二つ目は、西宮は便利な町で、ほかと比べたら緑が多く自然が豊かなところですが、再開発が進んでより高層化して風景が変わってきています。そうした中で、便利でありながら、人のつながりが深められるような地域社会をどうつくっていけばいいのか、家内が民生委員をやっているのですが、高齢者の方、マンション住まいの若いご夫婦の方、それぞれに悩みの声を聞きます。社会的に大きな問題で、一朝一夕に解決するものではありませんが、一人一人が身近なところでお互いに少しずつ関わりあうことが大事で、私も働きかけたいと思っています。

藤本 私の方からは、これからの西宮浜のまちづくりについて、そして市内の産業の活性化について提案をさせていただきます。一つは、西宮浜と市街地を結ぶ第二アクセス道路

がぜひ必要であると考えております。先ほど申しましたように、大震災後1年半という長期にわたり西宮大橋が通行止めになり、陸の孤島になりました。この大橋は下を船が通行するという事で太鼓橋になっていまして、平坦な端に比べ地震に弱い構造になっています。西宮浜と市街地を結ぶ自動車通行可能な道路は1本しかありません。神戸のポートアイランド、六甲アイランドのように複数の道路もなく、モノレール也没有ありません。第二アクセス道路の建設につきましては、震災直後から商工会議所さんのお力もいただきながら、市や県にお願いしているところでございます。最近では、南海地震、東南海地震の発生が警告される一方、新たに住宅団地のマリナパークシティが建設され人口も2万人を超えようとしていますので、第二アクセス道路の建設がぜひ必要であると考えております。

もう一点は、市民花火大会の復活です。昭和63年から震災前の平成6年まで西宮浜のイベントとして定着しておりました市民花火大会が地震によって中止になっております。花火を打ち上げる場所がない、保安距離がとれない、あるいは経費等の問題で再開は非常に難しいと言われております。私どもでは一昨年から秋のイベント「西宮マリンフェスタ」で、ヨットハーバー南側の海上に台船を係留して打ち上げ場所と保安距離を確保する。経費の分担につきましても、行政だけに任せず



民間で分担すれば再開は十分に可能であると考えております。神戸・芦屋・宝塚では震災後も継続して開催されておりますし、この花火大会の復活を願う市民各層の声が強い。魅力ある都市づくりを提唱している西宮市としても、ぜひ復活をお願いしたいと思います。

三番目に申し上げたいのは、市内には西宮浜産業団地・鳴尾浜産業団地・阪神流通センターの3つの産業団地がございますが、これらの産業団地と県や市・関係機関の間に、意見や情報の交換の場がございます。こうした場を設けていただくことで、産業振興・活性化を考えていく必要があるのではないかと考えております。

柿木 街づくりのいろんなキーワードが出てきて刺激的で、いずれも元気の出るようなお話でした。山田市長の新しい街づくりの柱の一つに「都市型観光」というものがございます。この「観光」という言葉は、中国の古典の「易経」の中に出てくる言葉で、「観国之光（国の光を観る）」を略したものだということです。昔中国のある王様が旅行をしていて、どの家のかまどからも煮炊きの煙が絶えない。そして夫婦に笑顔があふれ、子供たちの笑いが絶えない。それを国の光であると。そうした光を観ることを「観光」と呼んだのが、言葉の始まりだということです。

では、西宮の光は何か。先ほどからいろいろ出ているキーワードからあげてみますと、風景がいい、空気がいい、酒がいい、人情がいい、表情がいい。実は親しくしているある音楽家が西宮に移り住んだときに、「武庫川から西へ渡って西宮に来ると空気が違う」と言うんです。緑が多いということもあるでしょう。排気ガスが少ないということかもわかりません。私は、世の中の空気、街の空気ということだと思ったんです。雰囲気といってもいいかもしれません。「なんとなく西宮

へ来ると穏やかになる。落ち着く」と言っておりました。会頭さんが先ほど「文明」のマイナス面を「文化」というもので補って、文化レベルの高い街にしなければならないというお考えを述べられました。人間の社会には、弱肉強食の面もありますけれど、お互いに助け合う中で生きる道ができあがっていく。安全で安心して安徳な街をつくることによって、安住できる街ができる。西宮はそういう可能性を十分に秘めていると私は確信しております。これからお互いに力を合わせて努力しあっていく中で、こういう美しい街ができるんだということを全国、世界に発信していくことができるんじゃないかと思っております。

本日はお忙しい中、時間を割いてご出席いただきまして、心から御礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

シンポジウム・座談会を終えて

柿木 健一郎

昨年の10月27日、私は群馬県前橋市のホテルに居た。朝、部屋を出ようとしたとき、中越地震の余震が来た。震度5強であった。ホテルが激しく揺れた。体が硬直して、一瞬立ち竦んでしまった。阪神・淡路大震災の恐怖が体に染み込んでいたのである。

揺れはすぐに治まったが、私の不安はなかなか治まらなかった。また来るのだろうか、こんなところで死にたくないな、と思った。こんなところ一よその土地、異郷、知った人がひとりもない、本質的に他人の里。

いま、抵抗し難い速さで、社会の異郷化が進んでいる。数多の情報が流れているけれど

も、具体的な個人の顔・表情は見えなくなっている。人びとの肉声ー囁きも吐息も、しみじみとした喜びの声ーも聞こえない。ごく身近にいる人にも交わりの手は届かない。

まちは人で溢れているけれども、その人たちが何処の誰なのか、どんな人なのか、知っている人はいない。まちが異郷、他人の里になってしまいつつある。

阪神・淡路大震災は、このような異郷化によって疎外されていた、人間社会本来の故郷性を、復活させる契機となった。私たちは、倒壊した建物の中から、お互いの素の顔・表情を見つけ出した。瓦礫の下から、肉声ー呻きや吐息や喜びの声を聞いた。手をさしのべて助け合った。

お互いに「足を運び、声をかけ、手を差し伸べあう」具体的な行動のなかに、人間の原点があり、そこからほんとうの創造的復興、まちづくり、故郷づくりが始まる。そのことを私たちは震災を通じて、改めて確認したのである。その実践が、居心地の良い安住のまちをつくる。

情報も大事、住民や大学や企業や公共施設の数も大事、物の豊かさも大事。しかしもっと大事なことは、人びとがお互いに敬愛し、助けあい、心の底から親切であるー辰馬会頭はこれを文化力と言われたー、そういうまちが故郷になる。私たちが安心して生き、そして死んでゆけるのは、親切あふれるまち、母なる故郷があるからではないか。

震災後、私たちが頑張ったのは、そのような故郷を守る一家族を守り、会社を守り、地域を守り、国を守るという、強い責任感があったからである。シンポジウムや座談会の出席者の皆さんから、そういう責任感がひしひしと伝わってきた。良い勉強をさせていただいて、心から感謝申し上げる次第である。